

前4千年紀，遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成

——狩猟採集民による農牧文化の習得とステップへの進出という起業家的行動——

中川 洋一郎

はじめに——現代文明の起源としての遊牧——

- I. 農耕・牧畜のヨーロッパへの伝播と《古ヨーロッパ》の成立
- II. 遊牧の開始——メソポタミアの沖積平野における灌漑農耕の開始と
ほぼ同時期——
- III. 遊牧を成立させたイノベーション
- IV. 原インド・ヨーロッパ語族民の生成とイノベーションの群生的出現
- V. 前4千年紀半ばを分水嶺とするステップ遊牧経済の展開
おわりに——遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成——

はじめに——現代文明の起源としての遊牧——

今や国際的な意思伝達において、標準的な道具となった英語を始め、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などヨーロッパの大半の言語、さらにベルシャ語からヒンディー語など、世界中で話されているインド・ヨーロッパ語族に属する言語は、およそ6千年前、黒海・カスピ海の北方に広がる草原地帯（ステップ）に棲息していた遊牧民の団が話していた言葉がもとになって、その後、さまざまな時期にさまざまな場所で分岐して、今日に至った。祖語を話していた彼らは、原インド・ヨーロッパ語族民（Proto-Indo-Europeans）と呼ばれている。やがて彼らの子孫は、《機能本位原理》を自家薬籠中のものにする事で、物質文明を案出し、自己の文明の流儀を世界に無理強いすることに成功した。それは、彼らが世界の覇者となることと同義であった。

かくて、ヨーロッパ起源の規範が現代文明をつかさどっている。しかも、ヨーロッパ人の遠い祖先はステップで生成した遊牧民である。そうならば、「そもそも遊牧民起源の規範とは何か」、「それらは、いかにしてこの6千年間で普及し、定着したのか」、はたまた、「いかなる意味で、現代文明をつかさどっているのか」と問うべきであろう。

もともと、「現代文明は、ヨーロッパ物質文明の世界的な拡散と定着であるが、それは、もともと遊牧起源の文明的な規範を礎にして発展し、変形して、最終的に普遍化した」という本稿が主張している考えは違和感を生じさせるかもしれない。それは、地球の支配者となったヨーロッパ人（その延長線上にあるアメリカ人を含めて）が、一定の土地に定着して長年月が経過して、もはや

遊牧的な要素をあまり感じさせないからであろう¹⁾。

ところで、先史時代に遊牧という生業を開始したのは原インド・ヨーロッパ語族民だけではなく、セム系、チュルク系など、さまざまな民族の遊牧民がいた。遊牧民は、メソポタミアの沖積平野などで灌漑農耕にいそしむ定住民とは異なり、史上最初に土地から離れて遊動的に暮らす人々であり、その限りで自然と切り離されていて、独自の合理的な考え方をする人々であった。遊牧にこそ、機能本位原理の生成の起源があった。しかし、遊牧民が土地から切り離された最初の人々であり、その限りで「合理的な」思考ができる人々であったとはいえ、インド・ヨーロッパ語族民以外の遊牧民、セム系、チュルク系、モンゴル系（その存在が歴史史料で確認できるのは、8世紀以降であるが）なども、同様の資質を持っていたのではないか。では、なぜ、インド・ヨーロッパ語族民が、他の遊牧民を差し置いて、世界の覇者となることができたのであろうか。

前8000年頃、メソポタミアの《肥沃な三日月》地帯で農耕が開始され、前6500年から前6000年頃にヤギ・ヒツジが家畜化され、前5000年頃にメソポタミア沖積平野での灌漑農耕が開始された。オリエントで開始された農牧文化は、割合に早い時期にヨーロッパにもギリシャからバルカンを

1) 現在、世界の遊牧民の生態を見ると、ユーラシア大陸では、ユーラシア・ステップ中央のモンゴル高原にモンゴル族、東トルキスタンのウイグル族、チベット高原にチベット族などの一部の人々が遊牧を続けているが、もはやユーラシア・ステップの西部には、遊牧民はほとんどいない。あとは、西アジアの乾燥地帯にアラブのベドウィン族、マダガスカル島のベルベル族、アフリカのマサイ族などの中に、遊牧民がいる。インド・ヨーロッパ語族系の遊牧民で現存するのは、オセッソ人くらいであり、その他の人々は、移牧民であり、南ヨーロッパ（イタリア、ギリシャなど）で半ば定住しながら、日帰り遊牧（つまり、移牧）、あるいは、夏の高地での放牧と冬の低地での舎飼いを繰り返す牧畜民である。これら現存する遊牧民を対象にして、民族学、文化人類学などの分野で優れた研究が継続して行われ、優れた業績が蓄積されている。ただし、これらの実態調査で対象とされている遊牧民は、当然のことながら、現存の遊牧民である。「環境の激変に翻弄されがちで、辺境な地域へと追いやられた貧相な、脆弱な立場にあるパーリア（賤民）的な人々」というのが、現在の遊牧民が与えるイメージである。「[数世紀ごとに見られる大規模な]この第二種の移動に於いて、遊牧民は……ステップから爆発して砂漠と耕地の境界の彼方にある定住社会の平原や都市に殺到する」（トインビー 1970：259）などという記述に出会っても、現在の遊牧民を見る限り、あまり実感は湧かない。原インド・ヨーロッパ語族民は、遊牧民であったが、そのほとんどの人々は、前2500年頃までにはステップから出発して、その大半が草原を後にして、最終的に平野の農耕定住民を征服し、支配した。依然として遊牧民である人々と、割合に早くして遊牧民であることをやめた人々との違いに注意する必要がある。現地での実態調査で明らかになったモンゴル、チベット、アフリカの遊牧民は、市場社会にいわば寄生する貧相な浮浪者のような外観を呈する。遊牧が開始された7千年前から不断に遊牧を続けてきた人々の現在の有様を、すぐに（といっても、千年から2千年であるが）ステップから脱出して遊牧民をやめた意欲的な人々（インド・ヨーロッパ語族民）に当てはめるべきではない。当面の課題は、遊牧民をやめたあとのインド・ヨーロッパ語族民が、「遊牧民性」の何を残し、何を捨てたのかを解明することであろう。現代における遊牧民の実態に関しては、福井・谷（1987）や松井（2001）などに概観されている。なお、研究論文ではないが、松井重雄（2000）「ムラ人と遊牧民」『日本草学会九州支部会報』30（2）、29-34が、農耕定住民との対比で、遊牧民のメンタリティを解説していて、秀逸である。

経て伝播した。やがて農耕定住民がステップ周辺の狩猟採集民と接触して、狩猟採集民が農牧文化を修得した。彼ら牧畜を覚えた狩猟採集民がステップへ進出し、前5000年頃までに遊牧を開始した。かくて、原インド・ヨーロッパ語族民はもともと狩猟採集民であったが、定住農耕民と接触して、農牧文化を修得して、遊牧民となった。

つまり、彼らの遠い祖先である原インド・ヨーロッパ語族民は、もともと狩猟採集民であり、彼らは好んで、自らの明確な意図を持って、住環境として劣悪な草原へとあえて出て、遊牧民となった。草原地帯で、遊牧民として自己確立した後、明確な意図を持って、好んで「創業」の地である草原地帯を出て、意識的に定住民が居住する周辺地域の征服と支配へと向かった。かつて、草原という劣悪な住環境に身を置く遊牧民になったのも、はたまた草原を出て農耕が盛んな文明地域へと侵攻して、遊牧民であることを止めたのも、いずれも彼らの意図的な企てであり、意識的な選好の結果であった。

群居性草食動物の家畜化が成功したことで、生計を維持するための生業としての牧畜が開始した。牧畜は、定住民が農耕の傍らに営むことが多い。それに対して、遊牧は、広い意味での牧畜業に含まれるとはいえ、広大なステップで遊牧を営むので、広義の牧畜業の枠には収まらない特別の意義を持つことになった。

現代風に言うと、ステップでの遊牧（特に、綿羊飼育）開始は、リスクを取って果敢に新規事業に打って出るという、積極的な起業活動（Entrepreneurship）であった。初期遊牧民は、追い詰められてステップへ逃亡したのではなく、選択肢の一つとして遊牧を始め、積極的な「起業」活動として、その新規事業に成功した²⁾。

彼らの優れて起業家的な行動は、メソポタミア沖積平野での都市集積による人口増加、その結果としての羊毛への需要拡大に起因していた。その点で、優れて市場志向的であった。すなわち、彼らの部族民としての生成は、メソポタミアでの都市文明の開始とほぼ同時期であり、彼の地の需要を満たすという商業的な目的のために、いくつかの重要なイノベーションを活用することで実現したのである。

本稿の主要な目的は、まず第一に、原インド・ヨーロッパ語族民が遊牧民として生成したことの歴史的事実とその意義を確認するところにある³⁾。そのうえで、第二に、ステップでの彼らの遊

2) つまり、彼ら原インド・ヨーロッパ語族民は、単なる経営者ではなく、(シュンペーターが定義する)「起業家」であった。しかも、経常的な事業の継続を図る面でも、優れた企業家であった。だから、ステップでの遊牧に「これ以上の利が見込めない」と悟ると、ステップを離れることに、つまり、業態を変えることに躊躇しなかった。それゆえ、2千年ほど経過した前2500年頃までに、原インド・ヨーロッパ語族民の大部分は、ポントス・カスピ海ステップというその「創業」の地を離れて、周辺地域へと押し出していった。周辺地域で農耕定住民を征服し、支配することに、大きな新規の「収益機会を見出した」からである。

3) 遊牧民に関する研究は、日本において、文化人類学、生態学など多方面で、非常に精力的に遂行され

牧は、現代企業風に形容すると、イノベーションの群生的発現（一般には、《第二次生産物革命》と呼ばれている）に支えられた起業家的行動であったこと、さらに、第三に、中でも、前5・4千年紀におけるステップでの遊牧開始は、疑似親族原理から機能本位原理への形成を準備したという、組織編成原理史上の分水嶺となったことを展望していく。

I. 農耕・牧畜のヨーロッパへの伝播と《古ヨーロッパ》の成立

農耕・牧畜は、ヨーロッパへ、いつ、いかにして、伝播したのか。

前8000年頃、メソポタミアの《肥沃な三日月地帯》で農耕（ムギ作）が誕生した。その後、前6500-前6000年頃にかけて、ヒツジやヤギなどの中型の草食動物が家畜化された。かくて、《肥沃な三日月地帯》と呼ばれるメソポタミア周囲の丘陵地帯で、前6000年頃から、西アジア型の農耕文化（ムギ作農耕と家畜飼養の混合経済、すなわち、農牧結合経済）が確立した⁴⁾。その後一千年ほど後（前5000年頃）に、初期農耕文化が丘陵地帯から平野部まで拡散して、メソポタミアの沖積平野における本格的な灌漑農耕が開始された。このメソポタミア沖積平野における灌漑農耕を基礎に据えた文化をウバイド文化（ウバイドは、ウルの西方60キロにある遺跡名）と呼んでいる。

かくて、《肥沃な三日月地帯》で始まった新石器文化は、当時、最も先進的な農牧文化であった。そこで開発されたムギ作・家畜飼育・彩文土器の製作など画期的な文化は、時を置かずにアナトリア経由で西方に伝播した。前6500年頃までに、ボスポラス海峡を渡って、ギリシャに、そして、バルカン半島南部に農耕と牧畜が伝播して、農牧文化が花開いた。ヨーロッパ最古の新石器文化はギリシャの単色土器文化であって、前6000-前5000年頃に比定されている。

リトアニア出身の考古学者マリア・ギンブタス（1921-1994年）は、ドナウ川下流域に展開したこの新石器農牧文化を、《古ヨーロッパ》（*Old Europe*）⁵⁾と名付けた。ギンブタスが想定した《古

てきており、国際的にきわめて高い水準の業績を蓄積してきた。今西錦司、梅棹忠夫ら、京都大学に結集する優れた研究者たちが独創的な理論を開示してきた。今日でも、多くの研究者が現地での苛酷な環境の中で実態調査を実施し、それを基礎に丹念な研究成果が上梓されている。欧米の研究者たちが自分たちの民族的・宗教的ルーツを探るといふ喫緊の課題に迫られて、背景に切実な動機を持つものに対して、日本人研究者による一連の調査・研究は、学問的な動機から出発して地道な探求を重ねており、国際的にも独自の貢献をしている点で、賞賛に値する。現存する遊牧民はもはや限界的な存在と見られがちだが、実態調査に歴史的な研究を重ねると、彼らの持つ研究対象としての意義が非常に大きいことがわかる。

4) フランス CNRS のマルジャン・マシュクール (Marjan MACHKOUR) らは、家畜化の目的として、当初は肉の獲得というよりは、乳の入手であり、さらに儀礼的・威信の要素が大きかったと考えている (マシュクールほか 2008: 80-93)。

5) ギンブタス自身が《古ヨーロッパ》を簡潔に説明している。「〈古ヨーロッパ〉という用語は、ヨーロッパにおける前 (プレ) インド=ヨーロッパ文化に適用される。この文化は、母権的でおそらく母系

ヨーロッパ》は、いくつかの文化圏からなっており、「南はエーゲ海およびアドリア海とその島々から、北はチェコスロヴァキア、ポーランド南部、ウクライナ西部にまで」及んでいた（ギンブタス 1998：15）。《古ヨーロッパ》の文化は、前5000年頃までには、ドナウ河を西漸するかたちでオランダにまで及んでいるが、西漸が一段落すると、土器芸術や建築、祭儀の仕組みの面で、それまで人々をつなぎとめていた文化的統一性が崩れ、よりはっきりと地域的な発達を遂げるに至った。その主要な地域は次の五つである（ギンブタス 1998：16-33）。

1. エーゲ海・中央バルカン（スタルチェヴォ文化、ヴィンチャ文化）
2. アドリア海地方（押圧文土器文化、ダニロ／プトミール文化、フヴァル文化）
3. ドナウ河中流域（線帯文土器文化、レンジェル文化）
4. 東バルカン（カラノヴォ文化、ボイアン文化、グメルニツァ文化）
5. モルダヴィア／西ウクライナ（ブーク・ドニエストル文化⁶⁾、ククテニ・トリポリエ文化）

《古ヨーロッパ》は、新石器時代文化であり、おおよそ中石器時代が終了した前7000年頃（農牧文化がギリシャに伝播した時期）から北西ヨーロッパで青銅器時代が開始した前1700年頃までの中間に位置づけられる。ヨーロッパの新石器時代は、南西ヨーロッパでは約4000年間（前7000年頃-前3000年頃）、北西ヨーロッパでは3000年間（前4500年頃から前1700年頃）を下回った⁷⁾。

ギンブタスによると、《古ヨーロッパ》では、バルカン半島南部の小規模集落に居住する農耕民が、母系制的な組織を有し、非戦闘的、母神中心の信仰を営んでいた。《古ヨーロッパ》の非インド・ヨーロッパ語族系の農耕民は、後の青銅器時代に生成する原インド・ヨーロッパ語族民が、父系制であり、戦闘的な遊牧民であったことと、際立った対比をなしており、やがてステップから侵攻してくるインド・ヨーロッパ語族によって征服されてしまうというのが、ギンブタスの《クルガン仮説》である（クルガンは、原インド・ヨーロッパ語族の墳丘墓⁸⁾）。

的で、農耕を営み、定住生活をおくる平等で平和な文化であって、後に続くインド＝ヨーロッパ文化とは正反対の特質をもっている。インド＝ヨーロッパ文化は、前4500年から前2500年頃の間にはロシアの草原地帯から三度にわたって侵入した民族によってもたらされたもので、父権的で攻略的、遊牧的で可動的、好戦的文化であり、それは南と西の端を除いてほぼヨーロッパ全域に波及した。これによって古ヨーロッパの女神たち、より正確には実にさまざまな相をもつ〈創造女神〉は、インド＝ヨーロッパの支配的的な男神たちに大きくとって代わられた。つまり前2500年以降、古ヨーロッパとインド＝ヨーロッパというふたつの神話体系の混合が進んだのである」（ギンブタス 1998：2）。

- 6) ギンブタスは、1998年日本語版の著作では、「ブーク・ドニエストル文化」をククテニ・トリポリエ文化の範疇に入れて、《古ヨーロッパ》の枠内としている。
- 7) ヨーロッパにおける新石器経済の拡散に関しては、ベルウッド（2008：105-129）などを参照。
- 8) 「クルガン仮説」とは、1956年にギンブタスが提唱した原インド・ヨーロッパ語族民の《原故郷》に関する仮説である。彼女は、考古学的資料と言語学的知見をもとに、南ロシアのステップ地帯に数多く残っているクルガンと呼ばれる墳丘墓を彼らの首長の墓であり、その地を《原故郷》と考えた。なお、ギンブタスの挑戦的な仮説が当時の学界で激しい反発を受けた事情に関しては、SPRETNAK（2011）に詳

かくて、前5800年頃までに、西アジアを起源とする農牧文化を習得した人々（非・原インド・ヨーロッパ語族民）が、ポントス・カスピ海ステップ⁹⁾の西の端に、つまり、カルパチア山脈東の麓に到着し、それから2000年間、前3800年頃まで、現地周辺で棲息してきた狩猟採集民との接触が続いた。

この間、前5200-5000年に、ククテニ・トリポリエ文化が非インド・ヨーロッパ語族民による農耕文化として、《古ヨーロッパ》とポントス・カスピ海ステップとの境界地域に成立した。ククテニ・トリポリエ文化は、《古ヨーロッパ》において、新石器文化として代表的であり、前3000年頃まで存続して、他の《古ヨーロッパ》文化よりも千年ほど長命であった。おそらく前5200年頃までは、農牧民と狩猟採集民との境界線は、ドニエストル溪谷だった。それより先には農牧は進出していなかったものであり、狩猟採集民は、食料生産に携わることなく、狩猟採集を継続していたらしい（ANTHONY 2007：158）。

II. 遊牧の開始——メソポタミアの沖積平野における 灌漑農耕の開始とほぼ同時期——

1. 前5000年頃、メソポタミア周辺で遊牧的適応の開始

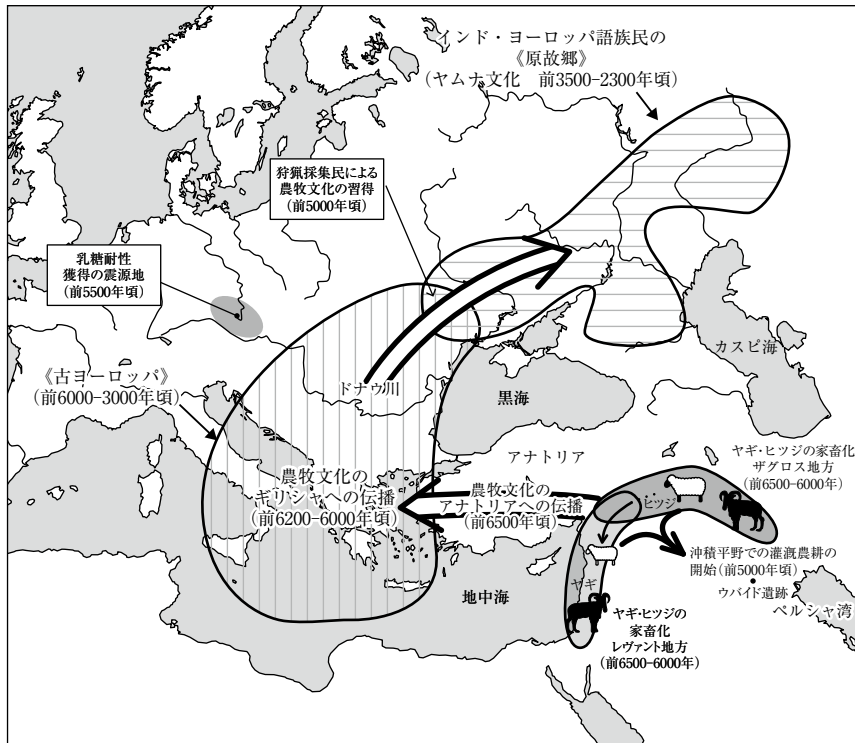
上記のように、メソポタミアでは、前5000年頃に、初期農耕文化が丘陵地帯から平野部にまでに拡散して、チグリス・ユーフラテス川の氾濫土砂に覆われた沖積平野における本格的な灌漑農耕が開始された。そして、きわめて興味深い展開が起きた。図1に見るように沖積平野における灌漑農耕の展開とほぼ同時期に、すなわち、前6千年紀末から前5千年紀初め頃に北方と西方の周辺草原地帯において、家畜文化圏が出現し、遊牧民的な適応が見られた（藤井1999：49）。乾燥圏にある草原地帯における遊牧の誕生と言うべきである¹⁰⁾。

しい。同じく、坂内（2011）を参照。

9) 黒海とカスピ海の沿岸から北方に展開する広大な草原地帯を、本稿では《ポントス・カスピ海ステップ》と呼んでいる。英語名では、通常、*Pontic-Caspian steppe* あるいは *Pontos-Caspian steppe* という名称が使用されているので、それを日本語にすると、ポントス・カスピ海ステップとなるであろう。*Pontos* は黒海沿岸地方を指しているが、古代からの用法では、アナトリアの黒海「南岸」地域を指し、北方対岸に広がるステップとは反対側の南方対岸地域を意味しているので、ポントスを使用するのはあまり正確な用法ではないと思う。つまり、黒海カスピ海北方ステップという呼称が一番正確ではないかと思うので、本稿ではそれを採用しても良いのだが、しかし、それはあまり馴染みのない呼称である。日本の地図帳では、ウクライナ草原、カスピ海草原、さらに、カザフ草原などと分けて呼ぶのが通例であろう。

10) レバノン・ザグロスなど、メソポタミア周辺の草原地帯における「遊牧的適応」に関して、藤井純夫がきわめて興味深い知見を披瀝している。「土器新石器文化（図8）：西アジア型の農耕文化（ムギ作農耕と家畜飼養との混合経済）が確立したことによって、沖積低地への進出が本格化した時代である（紀

図1 西アジア農牧文化の生成からステップでの遊牧開始までの伝播経路



注) ← 農牧文化の伝播経路

出所) ギンブタス (1989), 藤井 (1999), ANTHONY (2007) から筆者作成 (中川 2017d : 126).

灌漑農耕によるムギ生産量の急拡大は、巨大な収穫物の蓄積をもたらした。ムギを中心とする余剰生産物の蓄積のおかげで、この時期に形成され始めた都市集落における人口が急激に増加し

元前6000～4500年頃)。メソポタミア文明の農業的基礎が築かれた時代でもある。／この時代の最大の注目点は、1)ナトゥーフ文化以後、遺跡数が激減していた内陸部ステップ地帯で急激な回復傾向が認められること、2)その遺跡がいずれも超小型～小型であること、3)そこでの出土動物相が当初からヤギ・ヒツジ体制への唐突なシフトを示していること（その上、形態的にも既に家畜化したヤギ・ヒツジとして出現すること）、以上の三点である。これら一連の事実は、内陸部ステップ地帯のガゼル猟文化圏に、半ば完成した形の家畜文化が急速に拡散したことを、強く示唆している〔藤井 1998〕。その起点が（ヤギ・ヒツジ化で先行していた）地中海性気候帯の定住的農耕集落にあったことは間違いあるまい。従って、この段階こそがステップ的環境への遊牧的適応の開始時期と考えられる」（藤井 1999 : 48）。一般に家畜化の時期確定は簡単ではない。同様に、遊牧開始に関しても、時期確定には困難が伴う。本稿では、主として藤井純夫に従って、西アジアでの「遊牧的適用」の開始の期限を前5000年頃としている。なお、マシュクールら（2008 : 83）によると、ダニエル・ストルデルたちがシリアのエル・コウンでは遊牧がPPNB後期（前7500-前7300年）には開始していたと主張しているようだが（Daniel STORDEUR (2000) *El Kown 2, Une île dans le desert. La fin du Néolithique précéramique dans le steppe syrienne*. Paris), 筆者は未確認である。いずれにしろ、この説では、遊牧開始を従来の定説よりも2千年以上早い時期に設定していることになる。

た。集落住民による生活物資の必要量が増大して、ステップ産品への需要が拡大したのである。ステップは運輸・交通に便利であったので、もともと遊牧民は商業的な事業に従事していたこともあり、遊牧民による物資の供給により交易が発展した。かくて、前6千年紀末頃から沖積平野において灌漑農耕を営む部族と内陸ステップ地帯における遊牧民とが交易によって結びつく共存関係に入った。遊動遊牧民は、自立しては生活できなかったのであり、むしろ、遊動遊牧民が定住農耕民に依存して暮らしていた。

かくて、前8000年頃にムギ作農耕が始まり、前6000年頃に家畜化がなされ、さらに千年ほど後の前5000年頃にメソポタミア周辺の草原地帯で遊牧が開始された。では、メソポタミアの地からおよそ2000km離れたポントス・カスピ海ステップでは、いかなる状況にあったのか。

ユーラシア大陸の中央部には、南北の幅がせいぜい300kmから800kmで、東西方向に長さがおおよそ8000kmもの帯状のステップ地帯が広がっている。西はハンガリー平原から、黒海北岸のウクライナ草原、カスピ海北岸の南ロシア草原、アラル海とアルタイ山脈間に広がるカザフ草原、そして、アルタイ山脈の東に広がるモンゴル高原を経て、大興安嶺まで、いくつもの高い山脈に囲まれた草原が続いている。この広大な内陸部のステップ地帯では、年間降水量が100mm以下なので農耕には適さず、生育するのは主としてイネ科の草本のみである。セルロースの多い草を人間自身が食して生きていくことはできないから、ここで暮らすための生業としては、家畜に草を食わせて、その家畜から得られる肉や乳などを摂取する家畜飼育以外に方法はない。

牧夫とその家族は、日常的な食糧源（主として、乳と肉）および交易を目的にして獲得する資源（販売対象にする毛・皮・乳製品など）を家畜群から取得している。この場合、数頭の家畜を飼っているだけでは不十分であり、牧夫とその家族が生計を維持するには、家畜数は、一人当たりで最低限50頭（ヒツジの場合）は必要である。仮に夫婦と子供3人の遊牧民5人家族の場合、300頭程度だと極貧生活になってしまうので、多少なりともゆとりを享受するためには、せめて500頭（ヒツジ換算で）は必要である¹¹⁾。

11) 抱える家畜の種類、草原の状況や気候風土、あるいは、市場までの距離、運搬手段など、環境の条件がさまざまに異なるので、遊牧の規模には地域ごとにかなり差が出てくるであろう。ただし、牧夫とその家族の人数、および、飼養する家畜の頭数は、自ずと客観的な制約があるので、「ヒツジが200から300頭では、少なすぎて遊牧では生きていけない」という大まかな規模を想定できる。例えば、現代の中国・内蒙古での1992年の調査によると、遊牧の規模は、「全体では200から500頭の羊+牛10頭が平均的な経営像である。少数頭の羊飼養の経営では牛を30から70頭くらいをもつ。一般的に家畜の種類を混ぜて飼養する。家畜の調達基本的には自家調達である。羊のみであるならば、200頭以上もっていなければ生活していけない」（黒河 1992: 124）。また、ゲレルマーと佐々木のモンゴルでの調査によると、「では、生計を維持するために、どの程度の経営規模が必要なのか。…ロギーは…200頭以下の家畜所有世帯では牧畜所得が生計費を下回り、その割合は17万4千の牧民世帯のうち、85.5%に達していると述べた。…バトエルデンが1999-2002年の調査結果を基に提示した見解…では300頭以下が生計費をカバーできない層、301から500頭が生計費をカバーできる層、そして500頭以上が貯蓄可能な層とされていた」（ゲレルマー・

しかし、草は栄養価が低いので家畜1頭当たりの飼育必要面積が大きく、広範な地域に放して肥育するという放牧になってしまう。この場合、家畜群が大きければ大きいほど、そこから上がる収益が大きくなるが、群れが大きくなればなるほど管理が困難になるので、管理できる群れの規模には自ずと限界がある。結局、人間が遊牧で管理できる家畜頭数は自ずと限定されるので、500頭を超える規模の家畜群はまれになってしまう。家畜群の規模が500頭程度が実質の限界であるならば、同じく遊牧家族の規模もまた、平均で4～5人であり、それを大きく超える人数の組織は維持できないであろう。

もし、管理方法が徒歩による方式のままであったならば、遊牧民はいつまでも分散した小家族のまま全体としての人口規模も小さく、農耕定住民に対して、その周辺で賤民のような弱い立場のまま、農耕定住経済に依存する状態を続けていたであろう。

2. ポントス・カスピ海ステップにおける牧畜の開始

狩猟採集で生活していた先住民がメソポタミアを起源とする農牧文化と接触して形成された文化の代表的な存在が、南ブーク川とドニエストル川との間に展開したブーク・ドニエストル文化である。

前5800年頃に、アナトリア経由でヨーロッパに伝播してきた農牧文化が、ポントス・カスピ海ステップに接するカルパチア山脈東の麓に到着した。それをきっかけにして、南西方面からステップ近傍まで北上した彼ら農牧文化民（非インド・ヨーロッパ語族民）と、ステップ近傍のドニエストル川添いのステップ地帯に棲息していた狩猟採集民とが、接触し始めた。ただし、これらの土着の狩猟採集民は、外部からやってきた農牧民と接触しても、前5200年頃までは、主たる食糧源として狩猟採集を捨てることはなかった。農牧民と狩猟採集民との境界線は、ドニエストル渓谷だったのであり、それより先には農牧は進出しておらず、狩猟採集民は、食料生産に携わることなく、狩猟採集を継続していた（ANTHONY 2007: 158）。

前5200-5000年頃に、狩猟採集民は農牧文化を取り入れ始めるが、狩猟採集と川での漁業を主として、農牧（ムギとウシ）は副次的に実施していたにすぎなかった。つまり、彼らは選択的に農牧を実施していたのであり、いくつかの作物・動物は拒否していた。特にヒツジの飼育を拒否していた。新たな儀式・社会構造の兆しは見えなかった（MALLORY 1989: 189-190; ANTHONY 2007:

佐々木 2008: 238)。なお、遊牧における経営規模の研究として、上記の他に、甫尔加甫・黒河（1994）（1995）；志賀（2005）などがある。これらの研究は主としてモンゴルにおける遊牧を対象としているが、遊牧規模に関して、概ね「ヒツジのみの場合、300頭以下では生計不可であり、貯蓄可能な水準なら500頭以上」という想定は遊牧の規模一般について妥当なものと言えよう。しかし、その一方で、本文にも書いたように、収益増加を求めて家畜群の規模を大きくすると、その分だけ群れの統御・維持が難しくなるという疎ましい事情が出てくる。

159). それからおよそ1500年間、前3800年頃まで、農牧文化民と狩猟採集民との接触が続いた¹²⁾。

ドニエストル川東方のステップ境界域の狩猟採集民たちは、前5800年頃、食料生産民と接触しながらも、前5200年頃まで牧畜・農耕にはあえて携わらなかった。その理由は、アンソニーによると、文化が決定的に異なっていたからであり、言語が異なっていたからであった。つまり、アナトリア経由で南西から進出してきた農牧文化民に対して、もともとこの地域に生息していた狩猟採集民は別の言語を話していた。これこそ、後に原インド・ヨーロッパ語族の言語となる初源的な言語であったという仮説である¹³⁾。

南東アナトリアにおけるチャヨヌ遺跡などの発掘調査の結果と分析を踏まえて、本郷一美も、西アジアで家畜化が開始されて、定住農耕民が乳製品生産技術を磨いて、それがアナトリア経由で中央アジアのステップに伝播して、ステップでの遊牧が始まったと考えている¹⁴⁾。

12) 以上の経緯は、主として、MALLORY (1989: 189-190) と ANTHONY (2007) による。要は、ステップ近傍の狩猟採集民とバルカン半島南部の定住農牧民との接触が前5800年頃に始まり、1500年ほどの間に狩猟採集民が農耕・牧畜を習得して、ブーク・ドニエストル文化が成立したという解釈である (ANTHONY 説)。ブーク・ドニエストル文化は、ドニエストル川・南ブーク川間の地域を中心に前5200年頃から前5000年頃に成立したので、接触後にただちに狩猟採集民が農牧を始めたのではなかった。もともと狩猟採集民だったブーク・ドニエストル文化民が、『古ヨーロッパ』の農耕定住民に飲み込まれたのか、あるいは、原インド・ヨーロッパ語族民の祖先となったのかどうかは、学説としては、まだ定まっていないようである。

13) ブーク・ドニエストル文化民は、狩猟採集文化民であり、容易に家畜化を進めようとはしなかった。ヒツジを食べようとはしなかった。クリス (Cris) 農牧文化民との違いを保ったままだった。言葉が違うし、文化も違ったのが、その合理的な理由である。クリス文化民は、新石器時代のギリシャやアナトリアで話されていた言語と同類の言語を話していたが、ブーク・ドニエストル文化民はのちに原インド・ヨーロッパ語族言語を生む言語に属する言語を話していたに違いないので、プレ原インド・ヨーロッパ語族民 (Pre-Proto-Indo-Europeans) であるとアンソニーは位置づけている (ANTHONY 2007: 154)。

14) 「歴史的にみれば西南アジア地域で遊牧の存在は重要であるが、現在見るような形でのヒツジ・ヤギの遊牧は乳製品加工技術の確立が裏づけになければ成立しえなかったはずであり、むしろ高度に発達した牧畜の形態である。『遊動的』な生活形態という共通点を根拠として、遊動的狩猟民から遊動的牧畜民への移行を論じることはできない。ただし、乳製品加工技術が確立した後は、遊動的狩猟民が農耕民から積極的に家畜を取り入れていった可能性はあろう。現時点ではまだ考古学的データが不足しているが、中央アジアの草原地帯における遊牧は、西南アジアの定住集落を舞台に家畜化されたヒツジ・ヤギの飼育が、乳製品加工技術が確立されではじめて草原地帯へと拡散していった結果と考えるのが妥当であろう」(本郷 2002: 147)。

Ⅲ. 遊牧を成立させたイノベーション

1. 遊牧につきものの三つの難題—遊動生活維持・家畜群管理・生命財産保障—

メソポタミア周辺の西アジアでは、すでに見たように、前6000年頃から、ヤギ・ヒツジなどの群居性草食動物が定住農耕民によって家畜化されていた。新石器時代に始まったこの家畜飼育は、その後、周辺地域に拡散していったが、中でもアナトリアとバルカン半島南部を経由して、ウクライナなどからユーラシア・ステップに伝わったことで、青銅器時代（ヨーロッパでは、バルカンなど南部の早いところでは前3200頃から）に原インド・ヨーロッパ語族民の遊牧民としての生成をもたらした。さらに、鉄器時代（ヨーロッパでは、南部など早いところでは、概ね前1100年頃から）になると、ユーラシア・ステップで騎馬遊牧民（インド・ヨーロッパ語族系だけでなく、チュルク語系なども）が部族国家として形成され、ステップを震源地として周辺の農耕地域へと押し出してくるようになる。

家畜化するとただちに遊牧が可能となったわけではない。遊牧実現には克服すべき固有の難題がいくつもあった。難題のうち、主要なものとして、まず第一に、群れを統括する牧夫とその家族が家畜群に随伴して、広大な草原の中をあちこち移動して生活するのであるから、その間の飲料水・食糧をいかにして確保するのかという、遊動生活維持の難題。ついで第二に、三百頭は下らない大量の家畜の群れを草場を求めて、牧夫の思いのままに移動させ、群れを維持するという、家畜群管理の難題。さらに第三に、広大な草原の中、ポツンと核家族で生きていくという生命と資産の安全確保の難題。つまり、遊牧では核家族単位で行動せざるをえないが、それではそもそも大規模家畜群という唯一無二の資産を単身で守らなければならないという資産防衛と、何よりも自分と家族の身の安全が危険にさらされてしまうという、基底的安全確保という難題。

それゆえ、ヒツジなどの群居性草食動物を家畜化したのち、遊牧という、広大な草原地域における放牧による家畜飼育にまで展開・発展するのは、上記の難題を克服するためのいくつかの重要な技術的革新（乳加工製品の開発、車輪式荷車など）と安全確保への意図的な組織編成（集団としての牧夫同士の協力関係の構築）が必要であった。また、遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成に関しては、技術的側面では、ウマの家畜化（前4000年頃）によって可能となったウマへの騎乗そのものが特筆される。さらに、牧畜専業である遊牧を本格的に生業とすることが可能になるのは、群居性家畜の管理のための技法（去勢など）と、そして、《仲介者》を開発しなればならなかった。

2. 乳利用関連技法の開発

これら一連の技術革新のうちでも、広大な草原の中で、長期間生活するための安定的な食糧源

の確保という点で前提的なイノベーションが乳の恒常的な活用技法であった。

肉の摂取のためには家畜を殺さなければならない。しかし、家畜は、貴重な資産であるので、牧夫としては、自分の資産維持のために、できるだけ殺したくない。家畜を殺さずに、牧夫とその家族の生命維持が可能になるには、乳（場合によっては、血液）を摂取して、食糧にするほかない。つまり、乳の利用を可能にする乳利用関係技術が開発されて初めて、遊牧を生業として、草原で遊牧民（原インド・ヨーロッパ語族民だけでなく、彼ら以外の遊牧民も含めて）が生存していくことができるようになった。乳活用関連技法は、そのために不可欠なイノベーションであった。食糧としての乳の利用に関して、具体的には、①乳糖不耐の克服、②搾乳技法の開発、③乳の保存方法の開発という、三つの難問を解決しなければならなかった。

1) 乳糖耐性の獲得

現在、われわれは普通に乳製品を摂取している¹⁵⁾。しかし、人間以外の哺乳類は、他の哺乳類の乳を飲まない。そもそもヒトにしても、成人になると通常はラクターゼ（乳糖分解酵素）の生産を止めてしまうので、大人になってミルクを飲むと酷い下痢をする人々がいる。これが乳糖不耐症（Lactose intolerance）という現象である。ヒトが新石器時代になって他の動物の乳を飲み始めたというのは、これまでの動物の習性からして、本来は非常に奇妙な習慣であったし、無体な行動であった。

ところが、Yuval Itan らによるコンピュータ上での推計では、前5500年頃（今から7500年前）、ある人々に遺伝的な変異が生じて、乳糖耐性を獲得したという結果が出ている。同論文の図「ヨーロッパにおける乳糖耐性獲得の震源地」において、コンピュータによる推定地点は、ヨーロッパ中央のオーストリア近傍である（ITAN *et al.* 2009）。この仮説が正しければ、オーストリア近傍にいた狩猟採集民の中に、他の哺乳類の乳を摂取できるようになった人々がいて、その後、四方に拡散していったが、とりわけ北ヨーロッパに進出したゲルマン人たちにおいて、乳糖耐性を獲得した人々の割合が際立って高い（LEONARDI *et al.* 2012）。

別の遺伝子研究による推計では、乳糖耐性は、初めて前4600–前2800年に、ウラル山脈西側ステップで発現した。これによって、ヒトが乳製品を受容できるようになった。特に、遊動的放牧生活を送る人々の間で乳糖耐性が強い傾向が見られるという（ANTHONY 2007: 326）。

ところで、肉や乳・血液など家畜の肉体から直接摂取する食糧を第一次製品と呼ぶのに対して、ヨーグルトやチーズなど、加工工程を経た乳製品食料を《第二次製品》と呼んでいる。乳糖耐性に関する上記の論文などから、チーズ、バターなど、一連の乳加工製品の開発を享受した人々（原インド・ヨーロッパ語族民、特に、ゲルマン人）が、北部ヨーロッパ（ゲルマニア）に進出して、定着したことが、明瞭に表れている。いずれにしろ、新石器時代にゲルマン人たち（の祖先）が乳糖

15) 乳文化に関しては、平田昌弘の近著が世界各地の実態調査を基礎に、幅広い文献を渉猟したうえでの総合的な成果となっている。特に乳糖耐性に関しては、平田（2013：49-50）。

耐性を獲得したことは、ムギ作には本来適していない北ヨーロッパの地で農牧文化を定着させ、やがて牛乳などの乳の摂取を通じて彼らの栄養状態を改善し、体格を向上させることに貢献した。乳は食糧として栄養価が高いので、大人になっても日常的に摂取すると、強靱な「がたい」をつくる。これが、ゲルマン人による世界制覇を実現する一因となった。

東南アジアなど、米作・漁労文化の地域では乳糖不耐者の割合が高いため、本来は、牧畜文化に疎遠なことが一目瞭然である。日本人でも、乳糖不耐者の割合は、およそ80%と、世界の中でも非常に高い地域として推定されている。しかし、現在の日本では、牛乳は当然のこととして、バターやチーズなどをふんだんに使用した洋菓子や料理などで、牛乳など哺乳類の乳が広範に利用されている。乳製品の大量摂取は、都市化され、欧米化された生活の象徴である。もともとは乳糖不耐者にとって消化が難しい乳製品を日本人が大量に摂取しているのは、「慣れた」のか、遺伝子に変異が起きたのか、あるいは、「おいしい」、「栄養価が高い」というので、我慢して無理して摂取しているのか、いずれにしろ、日本人もまた、食生活の面で、知らず知らずに遊牧民文化の拡散と伝播を受け入れたことになる¹⁶⁾。

2) 資源としての乳の獲得

(1) 交尾の管理

乳を恒常的な食糧源として利用するためには、牧畜における性の管理として、交尾の管理が行われる。牧畜民にとって乳は主要な食糧であるから、一年中入手することを望む。牝は妊娠すると、乳が止まるので、もし群れの牝が一斉に妊娠すると、その群れの牧畜民が乳を入手できない期間が生じてしまう。この端境期を克服するために、牧畜民は妊娠を一時期に集中させずに、分散させるという手法を取る。そこで交尾期を分散させるのだが、そのために牝の群れをいくつか分割して、種牡を計画的にそれぞれの群れに入れていくことによって達成される。少なくとも中近東・地中海地域のヒツジに関しては、牝の群れを分割して、種牡を順序立てて配当することで、乳入手の端境期が克服されている。牧畜民は、秩序ある交尾を家畜に強制して、家畜の交尾期の幅を広げることで、乳欠乏に対応しているのである（谷 1976 : 25 ; 平田 2013 : 141, 269）。

16) 歴史的に見て、日本人が遊牧民文化とは最も疎遠な集団に属していたことは、乳糖不耐者の比率が世界の中で最も高い比率を示す地域にあることから明瞭であろう。にもかかわらず、現代の日本人は多量の乳製品を摂取している。しかも、食だけでなく、例えば、服装についても、われわれが普段着ている筒袖・ズボンも、もともと遊牧民の服装である。衣食に関して、事程左様に遊牧民文化の影響が決定的に大きいのであり、われわれもまた、それとは気付かずに、「遊牧民」化しているのである。しかし、衣食だけでなく、もっと本質的な領域で、すなわち、思想や、行動様式や、特に統治形態とその根拠において、「遊牧民起源の規範がわれわれをつかさどっている」というのが、本稿の（隠れた）モチーフである。特に、「主権」、「自由」、「民主主義」など、今ではほとんど疑いもなく正しい観念として一般に受け入れられている《普遍的理念》こそ、その起源には遊牧民（特に原インド・ヨーロッパ語族民）がいた。彼らこそが、この世の中を彼らの「文明の流儀」で改変してきたのである。遊牧民文化に関しては、福井・谷（1987）、松井（2001）などを参照のこと。

母の群れと子の群れとの分別と合体を繰り返す日常的管理、分別された牝の群れに種牡を適切な時期に投入するという交尾の管理、いずれも家畜の大群を計画に沿って用意周到に動かす管理技術の粋である。

(2) 搾乳技法の開発

搾乳は、見かけは簡単な作業かもしれないが、しかし、技法的難題があり、ヒトが搾乳できるようになるには、長年月をかけなければならなかった。

動物の母親は、実子にしか乳を飲ませないので、技法的には実子による催乳を行って搾乳する。また、捕獲の際にも、実子をおとりにして、親を捕獲したものと考えられる。つまり、乳を取るためには、効果的な母子関係への介入が必要である。乳は、牝が子を産んでから数ヶ月間しか搾ることができない。

また、いつも子と一緒にしておくとしが乳をすべて飲んでしまうので、母子は適当に隔離しておかねばならない。子が母の乳を吸うことができるのは、1日2回前後、一定の時間に限られる。従って、子が生まれた後の数ヶ月間は母の群れと子の群れとは別々に放牧される必要があり、この母子隔離はどの牧畜民でも行う基本的な家畜管理である。乳は遊牧民の基本的食糧であるから、たとえ換金されなくとも、各種の乳製品に加工されて自家消費されるか、あるいは、乳を利用できない季節のために保存しておく(松井1989:155)。

搾乳は高度な技法を要し、牧夫と家畜との関係が一段と高度にならないとできない。従って、ヒトが家畜化開始後ただちに、動物の乳を食物として利用してきたかどうかは、不明である。家畜化は、まず肉を目的に開始されたのではないかと想定されている。家畜として飼うためには、「群れレベルでの人付け」ができていて、牧夫の指示にヒツジなどの群れが従う必要がある。しかし、母と子はそれぞれ隔離されているのだから、搾乳の際には、特定の母に特定の子を連れて来て吸引させなければならない。この場面では、「群れレベルでの人付け」では、明らかに不十分である。牧夫はそれぞれ母と子の個体を認知できないといけなし、家畜の方でも搾乳誘導への牧夫の行為を認知できないといけなし、谷泰はこれを個体間の親和性が生まれている(「個体レベルでの人付け」)段階と考えて、搾乳の技法が成立するためには、個体レベルでの親和性に基づく人付けが前提であるし、家畜化の開始からしばらくは肉の摂取を目的とした牧畜段階があり、次いで、搾乳に関する高度な技法が成立してから遊牧民が恒常的に乳を利用できるようになったと考えている(谷1995:270-271)。

かくて、ウシやヒツジなど、群居性草食動物の日常的管理として、搾乳があるが、搾乳をめぐる諸関係と諸概念を整理すると、この搾乳にこそ、牧畜がのちの資本主義的観念を醸成したであろう拠り所が隠されていることがわかる。搾乳するという、牧畜民の一連の仕事は、資本主義的な要素を想起させる。搾乳において、牧夫(=資本家)は母獣(=資本)がつくり出す乳(=売上げ)の全部を自分が取得しては駄目である。それでは、子獣(=労働者)が死んでしまう。逆に、

乳（＝売上げ）を子獣（＝労働者）が全部飲んでしまうと牧畜民（＝資本家）は生きてはいけない。経営活動によって得た収益を、資本と労働との間でいかに分け合うかについて経営者が腐心するように、母獣の乳を子獣と人間との間でいかに分け合うかという搾乳計画が、牧畜民の思案のしどころである（佐藤1995：119）¹⁷⁾。

（3）乳保存技法の開発

乳は腐りやすいので、乳を食糧として確保して生存するためには、その保存方法の確立が不可欠であった。上記のような交尾の管理にもかかわらず、子畜の生まれる時期に偏りが生じて、牧畜民がミルクを飲めないを期間が生じてしまう場合もある。牧畜民は、ミルクを入手できる時期にたくさん絞っておいて、それを加工・保存して、ミルクのない時期を凌いでいる。歴史的に、ミルク加工の技法は、暑熱環境下の西アジアで始まり、それが冷涼環境下のユーラシア大陸北部に伝播して、発達して今日に至っている。乳製品の本来的な意義は、保存にある。ミルク加工・保存の技法が開発されたからこそ、牧畜民が1年中乳に依存した生活を送れるようになった（平田2013）。

3. ウマの家畜化、その時期と場所

上記のような乳利用の技術的克服によって、草原の中で遊動的に生活する遊牧が可能となった。ただ、原インド・ヨーロッパ語族民には他の遊牧民にはない特性（あるいは、技術的強み）があった。ウマの家畜化によって可能となった騎乗である。

前5000年頃に、ステップでの家畜飼育（＝遊牧）が開始され、原インド・ヨーロッパ語族民が来てステップでの遊牧に打って出たことは、乳利用関連技法の開発の賜であり、遊牧開始と原インド・ヨーロッパ語族民の生成とが密接に結びついていたことを示している。原インド・ヨーロッパ語族民には、他の遊牧民にはない特性があった。遊牧が可能となったのは、後段で見るように、メソポタミアにおける人口集積による需要拡大という市場の要請を背景に、ウマの家畜化と騎乗、車輪式荷車（wheeled wagon 以下、ワゴンと略）の開発、そして、イヌの《仲介者》化という、一連の技術革新が実現したおかげであった。とりわけ、ウマの家畜化こそ、原インド・ヨーロッパ語族民の生成と密接に関連している。従って、英語圏住民を始めとして、現代のインド・ヨーロッパ語族民にとって、ウマの家畜化の起源という研究テーマは、自身の祖先の起源と密接な関

17) 平田昌弘も、その広範な実態調査を基礎にした乳文化論の中で、遊牧民にとっての乳の重要性を次のように述べている。「ベドウィンと生活を共にしていると、ベドウィンはヒツジやヤギを屠って肉を食するよりも、その乳を食して生活していることに気づく（…）。乳に依存して生活を成り立たせるといふ生業は、家畜という元本はそのまま残しておいて、乳という利子に頼って生きぬく戦法だ。元本は手元に留めているため、食料生産が一層安定することになる。厳しい生態環境であるからこそ、乳は生きるための恵みとなる」（平田2013：2）。

係があると信じているだけに、ことのほか重大な関心を掻き立てている¹⁸⁾。

野生動物の家畜化とは、一般に、野生の動物が「その生殖がヒトの管理下にある動物」(野沢 1987: 66) に変化することと定義される。その場合、中間的な移行期間が生じるので、そもそも家畜化の時期を厳密に規定するのは容易ではない。特にウマに関しては、家畜化された後の形態変化が他の家畜(例えば、イヌやウシ)に比較して、小さかった。その分だけ家畜化の時期に関して不安定であったので、これまで多くの論議を呼んできた¹⁹⁾。

ウマが家畜化された決定的な証拠の存在は、前2000年前後であるが、実際の家畜化は、それより以前に実現していた。従来からの伝統的な見解では、前3000年頃と考えられてきたが、ドレイフカ(現在のウクライナの地名)での遺跡調査を重視する見解から、前4000年頃というのが定説的な見解となっていた²⁰⁾。

また、近年、大規模な調査が実施されたボタイ(カザフスタン北部)における発掘調査から、発掘された膨大なウマの骨は、考古学的な証拠として、前3500年前後のものと考えられている(OUTRAM 2009: 1332)。ボタイでの定住遺跡の年代、つまり、前3600-前3100年には、ウマが家畜化されていたことが「夥しい2次の証拠から証明されている」(PETERSON *et al.* 2006: 92)。

考古学的な調査によって、ボタイでの最初の定住的ウマ飼養者の生活様式が明らかとなっている。それによると、肉と乳の恒常的資源を欠いていた狩猟採集民とは大きく異なっており、家屋がよく整合的に建てられていた。従って、イヌ以外の家畜を持たない、遊動的なウマ狩猟採集民の拠点とは考えられない。そこで、そのかなり高度な居住形態から見て、学問的には、西方のウ

18) サウアーの見解では、インド・ヨーロッパ語族民の《原故郷》の想定は、ウマの家畜化と結びついている。すなわち、ウマを家畜化してきた少数の集団が機動力と戦闘力を得て、世界征服を果たしたという神話的なイメージである。この場合、ウマの家畜化が成功した地域としてウクライナが想定されているので、定説の見解によると、ウクライナを原故郷とするインド・ヨーロッパ語族民が、紀元前3千年紀から紀元前3世紀までに、ユーラシア・ステップから出発して古代農耕文明に侵入し、各地で征服者として君臨することによって、ほぼ今日に至るまでのユーラシア大陸における民族の地勢的配置を決定したという。この好戦的な集団は、ウマだけでなく、二輪戦車・騎兵などの戦争・征服の新しい形態、軍人貴族などを携えていた。かかるインド・ヨーロッパ語族民の来襲・征服・支配によって、相対的に少数の来襲者(多くの場合、半農半牧民的性格が強い)が相対的に多数の農耕定住者を征服し、支配するという二重社会の形成が進行したのである(サウアー 1981: 170-171)。

19) 主要な食用・役用の動物(ウシ、スイギュウ、ウマ、ロバ、ブタ、ヤギ、ヒツジ、イヌ、ニワトリ)の中で、ウマは家畜化が最も遅かった(野沢 1992: 3)。

20) ウマの家畜化の時期・場所について、従来の学説では、概ね前3000年頃と推計されてきた。ドレイフカ発掘による従来からの定説の微調整を末崎(1993: 52)が紹介している。ドレイフカの遺跡から出土したウマの骨をもとに、家畜化は前4000年頃というのが定説となったが、疑義も出ている。しかし、前2900年以前であることは、ありうる。近年のデーヴィッド・アンソニーらのウマの家畜化の起源をめぐる論争では、ハミ址を持つ一体のウマの骨が出土したことから、ドレイフカがウマの家畜化の起源とみなされてきたが、異議も出ている(川又 2005: 143)。

ラル地方からの移民がすでに家畜化されたウマを携えてきたとも想定されている（PETERSON *et al.* 2006 : 95）。つまり、ボタイが最初の家畜化の舞台であったかどうかは不確定である²¹⁾。

川又正智（2005）は、近年のデレイフカ遺跡とボタイ遺跡での発掘調査結果から、その研究成果であるD・アンソニーなどの見解を参照しつつ、現状での結論として、「総合すれば、やはり前3000年以前に馬は家畜化されていることになろうが、これでは以前からいられていた説とかわりがない」（川又 2005 : 146）と述べている²²⁾。一方、その家畜化の場所についても、前5000年時点で野生のウマが大量に棲息していたのは、まず第一に、ユーラシア・ステップであったこと、狩猟採集民による狩猟の主要な対象であり、食糧の主要な部分（40%以上）となっていて、黒海北方・カスピ海沿岸のステップでは、長期間にわたってウマを猟の対象として慣れ親しんできたことから、ユーラシア・ステップが家畜化された第1候補となっている（ANTHONY 2007 : 199）。

ウマの家畜化が前4000年頃のデレイフカであろうと、前3600-前3100年のボタイであろうと、はたまた、その中間のウラル地方であろうと、ウマの家畜化に成功した人々が原インド・ヨーロッパ語族民であったことは、ほぼ確実であり、今のところ、疑義は出ていないようである²³⁾。やがて、西アジアでの発明と結合したウマ活用術は、ステップから逆の方向を辿り、メソポタミアを始めとする西アジア全域に広がり、活用された²⁴⁾。

ウマの家畜化には、他の動物にない特性をウマが持っているのできわめて大きな意義があった。だからこそ、原インド・ヨーロッパ語族民が他の部族民に比べて、いち早く家畜化できたことの便益は非常に大きかった²⁵⁾。

21) ただし、「現在、動物考古学者のあいだでは、デレイフカとボタイ両遺跡出土馬骨については野生とみなす説が強いとのことである〔本郷一美による 2004〕」（川又 2005 : 146）。恐らくその典拠の一つが、LEVINE（1999）かと思われる。

22) 日本における家畜研究の権威、加茂儀一（1899-1977年）の古典的な書物『騎行・車行の歴史』でも、「最後に家馬の家畜化の地域として残っているのは、ウクライナと呼ばれている黒海の北岸周辺と東ヨーロッパのダニユーブ河流域の草原地帯である。これらの地域は前2800年ころのトリポリエ文化の遺跡が存在しているところであって、そこからは最も古いと思われる家馬の骨が発掘されている。この地方は、当時インド・ヨーロッパ語を話す原始のインド・ヨーロッパ人の住んでいた地域であり、従って彼らが土着の野生馬、すなわちタルパンをはじめ家畜化したのである。…いずれにしても前3000年代の中ごろあるいはその末にこの地方で馬の家畜化がはじめて行われたことは確かである」（加茂 1980 : 17）と述べられているので、すでに40年ほど前の加茂の議論と大きな変わりはない。

23) クラットン=ブロック（1989 : 134 ; 1997 : 79）。

24) 「ウマが野生棲息地をこえて最初拡大したのは、前第二千年紀、古代戦車（戦闘狩猟用の二輪馬車・チャリオット）牽引用としての利用によるもので、ブリテンから黄河流域まで似た構造の古代戦車が出土する。騎馬開始は不明であるが、騎馬普及期は前1000年ころで、これは騎馬遊牧民がめだってくる時期」（川又 2005 : 147）。

25) 「馬はおそらく犬や猫について人間に親近な家畜であろう。しかも人間を信頼することにかけては犬に

IV. 原インド・ヨーロッパ語族民の生成とイノベーションの群生的出現

1. 原インド・ヨーロッパ語族民の生成

1) スレドニ・ストグ文化（前4400-前3400年）—前期・原インド・ヨーロッパ語族民—

すでに見たように、ククテニ・トリポリエ文化が定着したバルカン半島南部の北東方面には、ポントス・カスピ海ステップが広がっていて、そのステップと南方の平野との境界領域には、狩猟採集民が暮らしていた。彼ら狩猟採集民がククテニ・トリポリエ文化（および、クリス文化）と接触することで、前5200年頃までに、農牧文化を習得して、初歩的な農耕と家畜飼育を開始した（これをブーク・ドニエストル文化という）。

ブーク・ドニエストル文化の終焉後、6百年ほどして、さらに東方のドニエプル川東岸からステップでウマの飼養を特徴とする農牧文化が形成された。彼ら狩猟採集民による定住的な農牧文化をスレドニ・ストグ文化（Sredny-Stog Culture 前4500-前3400年頃）（MALLORY 1989:198）と呼んでいる。スレドニ・ストグ文化の担い手は、アナトリアから渡来してきた農耕民とは異なる言語を話す狩猟採集民であり、彼らこそが原インド・ヨーロッパ語族民の先行的な人々（前期・原インド・ヨーロッパ語族民）であると考えられる。かくて、ポントス・カスピ海ステップで、前4500年頃になると、狩猟採集民が遊牧を開始した（ただし、この時期はまだウシ中心か）。原インド・ヨーロッパ語の祖語には、犁とか、ムギなどの農耕関係の一連の言葉があったことが確認されていて、原インド・ヨーロッパ語族民が生成した際には、遊牧民という性格と同時に、農耕民という性格も持っていた。原インド・ヨーロッパ語族民について、「半農半牧」と規定されるのは、定住して農耕にも従事していたからであろう。

かくて、メソポタミア周辺でのムギ作開始後、およそ3千年が経過して、ようやく前5000年頃、ステップ近傍の狩猟採集民が農牧文化を受容し、生活圏をステップに広げるために、それから5百年程経過すると、遊牧的な適応を始めた。ちょうど、前5000年頃にはメソポタミア南部で灌漑農耕が開始され、いよいよ沖積平野で人々の居住形態が都市化に向けて拡大する時期に当たって

劣らない。その上に馬は家畜のうちで一般的には最も大型の動物であって、人間よりも大きいこの動物が人間の愛情の対象となり、馬もまたその愛情に応えてくれる以上、人間の馬に対する感情は他の動物に比較して格段のものであり、この大型の動物が昔から他のいかなるものよりも人間に対して絶対の信頼をもち、人間がこの動物に乗ったり、自分の乗る車をひかせて主人顔をするのができたことを、人間は馬の家畜化以来誇りに思ってきた。それは現代の自動車乗りや飛行士が運転台に乗って颯爽たる気持で得意気になっているのと同じ気持である」（加茂 1980:2-3）。前述の乳加工製品の開発とウマの家畜化、さらに、後述の騎乗の開始の他、車輪式荷車の開発のおかげでステップという広大な地域での遊動的な遊牧生活が可能になったこと、イヌを《仲介者》として採用することで、数百頭のヒツジを遊牧で飼育できるようになったことが重要である。

いた。つまり、農耕が開始され、ヤギやヒツジなどの中型の群居性草食動物が家畜化され、沖積平野での灌漑農耕が開発されたという状況が整って、そのうえで、狩猟採集民による農牧文化の受容の結果として、遊牧が生成した。

前5200年頃までにステップへのウシ飼育の導入が始まり、それと同時に、人口移動も始まって形成されたスレドニ・ストグ文化こそ、初期の原インド・ヨーロッパ語がステップで話され始めた画期的な時期である。この文化の特徴は、①ステップ内部経済の熟成、②社会的ネットワークの熟成、③《古ヨーロッパ》との新しい関係の構築だと、アンソニーは総括している（ANTHONY 2007：240）。

2）ヤムナ文化（Yamna Culture 前3500-前2300年）—後期・原インド・ヨーロッパ語族民—
前3500年頃までに、ステップの狩猟採集民が初期農耕と家畜飼育を本格的に習得していた。かくて、前4千年紀半ばから前3千年紀半ばまで、ドニエストル川とウラル川に挟まれた草原地帯（ポントス・カスピ海ステップ）において、銅器・青銅器文化が台頭した。狩猟採集民が、先進的な農耕定住民と接触して、農牧文化を受容し、習得した。その結果、一時的に定住するが、その定住民の中から、ステップへ進出して、遊牧を開始する人々が出現した。この文化の担い手こそ、後期・原インド・ヨーロッパ語族民であり、この文化が展開した地域こそ、原インド・ヨーロッパ語族民の《原故郷 Homeland》と考えられている。

早期ヤムナ文化が、前3300年までに黒海カスピ海北方ステップの全体に拡散すると、地域間の変異が生じた。その結果、後期・原インド・ヨーロッパ語族民が各地に生息するようになった。その一環として、やがてドナウ川流域への遊牧民文化が拡散すると、恐らくはその結果として、《古ヨーロッパ》は崩壊していった。

ヤムナ文化民は、遊動生活を送り、ウマに乗っており、基本的に遊牧民であったが、同時に、川沿いの耕作地で、農耕も行っていた。もともとの狩猟採集民が、ククテニ・トリポリエ文化との接触を経て農牧文化を受容したのち、家畜文化をステップの環境へと応用したのである。ステップ地帯で遊牧を営むためには、数々の技術革新が実現しなければならなかった。

2. ポントス・カスピ海ステップでの遊牧開始の新規性

1) シュンペーターによるイノベーションの5類型

前4千年紀に原インド・ヨーロッパ語族民がポントス・カスピ海ステップで実現させた「事業」は、優れて革新的であった。もちろん、今からおよそ6千年前のステップで彼らが実行したことで、現代社会での企業行動との間には、時間の隔たりだけでなく、そもそも経済的環境が隔絶しているという、非常に大きな違いがある。なによりも、現代資本主義経済においては、市場が全面的に発展し、膨大な規模で起きている物的生活の維持・再生産が基本的に市場を経由しているのに対して、そもそもごく僅かの資源・エネルギーしか利用していなかった前4千年紀当時のス

テップ民にとって、主要な生活資料は自給自足で獲得しており、交易に頼る部分は相対的に少なかった。イノベーションの群生的出現にしても、現代社会ではインターネットを始めとする通信技術の発達のおかげで、イノベーションは出現するや否や、数年のうちに伝播するのに対して、前4千年紀の世界では、伝播には数百年単位の時間を要しても不思議ではなかった。

現在はイノベーションあるいは革新と呼ばれている事象を、ヨーゼフ・シュンペーター（1883-1950年）は、『経済発展の理論』（原本1912年刊）の中で、「新結合」と称した。彼によると、生産とは、われわれの利用するいろいろな物や力を結合することである。生産物および生産方法の変更とは、これらの物や力の結合を変更することであり、「新結合」とは、経済主体が非連続的に行う、物や力の結合の変更のことに他ならない。彼は、「一定条件に制約された経済の循環」において、理論上の想定として、内部からの発展がない状態の経済を、与えられた外部環境に適応する限りでの変化のみが生じる経済として描いている。こうした経済においては、「創造的役割」は存在しない。シュンペーターは、旧結合から漸次に小さな歩みを通じて連続的な適応によって「新結合」に到達するのではなく、「新結合」が非連続的にのみ現われることができ、また事実そのように現われる限り、発展に特有な現象が成立すると考えた。つまり、外部環境に適応する限りでの変化が生じる経済から、自ら変化を作り出す経済への転換こそが、シュンペーターが考える経済発展だった（シュンペーター 1980：137-199）。

シュンペーターによると、「新結合」、つまり、「イノベーション」は、以下の五つに分類される²⁶⁾。①新しい財貨の生産、②新しい生産方法の導入、③新しい販路の開拓、④原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得、⑤新しい組織の実現（シュンペーター 1980：152）。ここでは、本稿での論旨に従って、次の順に論じていこう。

- (1) 新市場
- (2) 新商品
- (3) 新生産技術（生産方法）
- (4) 新資源（供給源）
- (5) 新組織

2) 前4千年紀半ばに原インド・ヨーロッパ語族民が活用した五つのイノベーション

スレドニ・ストグ文化が前3500年頃に終焉し、後期・原インド・ヨーロッパ語族文化の代表格であるヤムナ文化が形成される前4千年紀半ば頃に、表1「前3500年前後における遊牧関連イノベーション」に見るように、ステップ世界で一群の大きなイノベーションが起きた。

26) シュンペーター（1980：152）は、コンドラチエフの長期波動の動因を検討する際に、このような五つの動因を挙げた。

表1 前3500年前後における遊牧関連イノベーション

イノベーションの領域	イノベーション
新市場	メソポタミアの人口集積
新商品	ウール製品
新生産技術	騎乗
	ワゴン
新資源	緬羊
	乳加工製品
新組織	《牧夫→イヌ→家畜群》からなる初期遊牧組織

出所) 筆者作成。

(1) メソポタミア下流域における都市集落の出現という、新市場

前5000年頃にメソポタミア沖積平野において灌漑農耕が開始され、その発展によって、人口集積が起きた。ウバイド文化第3・第4期（前5000-前4000年）には、チグリス・ユーフラテス下流域のあちこちに数百人規模の人口密集地である集落が形成され、前3500年頃には人口集積が加速化され、前3000年頃にはウル、ウルク、ラガッシュなど、史上初の八つの都市国家が出現した。メソポタミア下流域における都市集落の出現は、新市場の創出であった²⁷⁾。

灌漑農耕開始からわずか2千年ほどで出現した（当時としては）巨大な都市には、ムギと泥は有り余るほど豊かにあった。しかし、だだっ広い一面の砂漠の中に都市が忽然と誕生したのであるから、水を除くと、基本的な生活物資はほとんど何もなかった。衣食住のうち、食は、大量のムギやマメ、それに家畜や川魚で何とかなるとしても、また、住は、泥で作る日干しレンガをふんだんに使用するにしても、どうしても構造や家具、道具など、大量の木材が不可欠であった。当時は存在していたレバノン杉の森から、木材を大量に輸入した。さらに、衣は、麻の他、ウールに対する需要が急速に拡大した。メソポタミアの初期都市国家群は、その集積した巨大な人口を維持するために、近隣あるいは遠方の諸地域からの大量の物資の輸入に依存していたのである²⁸⁾。

南のメソポタミア都市文明と北のステップ遊牧民との交易は、前3700-前3500年頃に開始した。このころ、ステップの遊牧民たちは、ワゴンをメソポタミアからマイコップ文化（コーカサス山脈北部山麓）経由で、初めて導入した。その対価として、交換に、おそらく羊毛を輸出した。しかし、あまり交易は盛んではなかった（ANTHONY 2007: 264）が、ワゴン（当時は、ウシが牽いた）が輸送には大いに役立った（ANTHONY 2007: 282）。前2300-前2000年頃、アッカド朝からウル第三王朝にかけて、メソポタミアの諸都市では、金属・宝石・木材・革製品などの原材料、家畜・奴隷などへの需要が急激に拡大した。権力への吸引力が増したことを意味した。ステップでの遊牧民

27) メソポタミアにおける都市集積については、小泉（2001）など。

28) 亜熱帯地方の沖積平野に出現した古代メソポタミア文明は、きわめて資源浪費的であった（平野・堺1995）。

たちもそれに対応し、やがて、前1500年までにミタンニ（インド・ヨーロッパ語族民）がアナトリアに侵入し、支配者になった（ANTHONY 2007：412）²⁹⁾。

メソポタミア沖積平野での都市集積が開始し、大規模な人口集積が実現したので、衣料品への需要が急増した。中でもウール製品への需要が急拡大したというように、イノベーションが市場志向的であった。

(2) ウール（羊毛）製品という、新商品

メソポタミアでは前5000年頃から灌漑農耕が開始されて、ムギの生産力が増大し、人口集積が進んだ。都市での人口が増加した結果、繊維製品に対する需要が急激に大きくなった。

先史時代の西アジアと旧大陸では亜麻と羊毛（ウール）が繊維の主要な原料であった。亜麻が繊維として利用された最古の証拠は前7千年紀（先土器新石器時代B）に遡り、それ以降、前3千年紀まで、西アジアでは主要な繊維原料であった。しかし、亜麻を繊維として利用するにはとても手間がかかる（須藤 2008：95）。ウールは、亜麻に比べて繊維にするのに手間がかからないし、染色も容易である。亜麻は手間がかかる分だけ、ウールよりも高価であったかもしれない。それらの理由もあって、都市住民からは、亜麻よりもウールが重用された。

羊毛の利用が証拠で確実となるのは、前5千年紀であるが（須藤 2008：96）、羊毛織布としてヨーロッパで存在していたのは前3300年以降なら確実である（ANTHONY 2007：63）。羊毛の利用が重要性を帯びてくるのが前5千年紀からであるが、遺跡での動物の骨などの分析から、前4千年紀になって羊毛利用の傾向が強まってくる。メソポタミアとイラン西部で最初の都市文明が発展したが、そこでは染色に容易なウールが麻よりも選好され、重用された。

(3) 広大な過疎地での遊牧という、新生産技術

遊牧を可能にした一群のイノベーションがあるが、遊牧そのものを生産技術のパッケージとして捉えると、それらのイノベーションは遊牧という新生産技術を現実化する技術であった。基本的に、①ウマへの騎乗、②ワゴンの普及、さらに、（新生産技術というよりは、新資源という位置づけなので、次項で論じるが）③乳加工製品の開発によって、広大なステップでの遊牧が可能となった。

① 騎乗による家畜群管理

騎乗の起源、その場所、効果・歴史的影響については、欧米で盛んに研究され、文献も豊富である。日本でも、家畜文化研究の権威、加茂儀一は、彼の大作『家畜文化史』（1937年初版、1970年改訂版）において、騎乗と車行について、同書の中で膨大な紙幅を費やして論じている。

騎乗（riding）は、慣用的にはウマの背に乗って移動することだが、動物の背に乗ることなら、ヒトはすでに西アジアでウシやオナジャーに乗っていた³⁰⁾。つまり、先進文明地帯である西アジア

29) 前2100-前2000年に中央アジアから、初期シタシュタ文化に対して、銅需要が急激に増加したので、ステップ北部の社会に大きな変動を引き起こした。メソポタミア都市からの需要が呼び水となって前2100年以降にステップでの金属生産のブームが起きた（ANTHONY 2007：435）。

での行動を、ユーラシア・ステップ民がウマに応用して実現した。同様に、動物が牽引する荷車もまた、西アジアでウシやオナジャーによって開始されたのを、ステップ民がウマに応用したのである。このように、もともと西アジアで開発された騎乗とワゴンがステップに伝播されて、その地でウマと結合して大規模に活用したのが、ステップ民、おそらくは、原インド・ヨーロッパ語族民であった³¹⁾。

騎乗の時期については、ウマを家畜化して群れとして飼養するには、管理のためにウマへの騎乗 (horse riding) が不可欠なので、恐らく、前4200年以前に、ポントス・カスピ海ステップで始まっていた。ポントス・カスピ海ステップの外へのウマの普及は前3700-前3000年であろう (ANTHONY 2007: 221)³²⁾。

ウマの家畜化と騎乗の開始が、遊牧にもたらした意義としては、騎乗した牧夫が家畜の群れとともに迅速に移動できるという利便性がある。牧畜管理技術のうえでは、騎馬によって、群居性草食動物（ヒツジ、ウシ、ウマなど）の大群を管理できるようになったという技術革新が特筆される。例えば、騎乗の効果としては、イヌ1頭の助力を前提に、徒歩ではヒツジ200頭しか管理でき

30) メソポタミアにおけるウシやオナジャーによる車の牽引が、前2千年紀初頭にウマによる牽引というアイデアに繋がった。同じく、近東でのウシやゾウへの騎乗が、ウマへの騎乗に応用された。「農地の耕作や物資の輸送にウマを使役するのは確かに重要な用途であるが、軍事的用途に比べればマイナーであると言わざるを得ず、…全世界への家畜馬の伝播も、侵寇軍の動力源がウマであったことにはほぼ帰せられる」(野沢 1992: 5)。

31) 「このような車輪の改良、ウマと車を結びつけたのが、インド・ヨーロッパ語族民であったと考える研究者が多い」(末崎 1993: 21)。

32) ウマの家畜化の起源に関しては、膨大な議論が蓄積されている。ここでは、主として、デーヴィッド・アンソニーの見解をまとめておく。いつ、ウマの家畜化と騎乗が開始したのかについて、説得力のある証拠がなかったことが、最大の問題であった。アンソニーによると、銜（ハミ）の着用こそ、ウマの歯に病理痕を残すことでこの問題を解決するであろう (ANTHONY 2007: 459)。基本的に、riding（騎乗）も、wheeled wagon（車輪式荷車、つまりワゴン）も、その発明自体は、当時、先進的な文明であった西アジアのメソポタミアで行われた。ステップに生息していた遊牧民は、中でも原インド・ヨーロッパ語族民は、すでに家畜化していたウマとそれらの発明とを結びつけた。場所については、騎乗は、カザフスタンで開始されたのではなく、ステップ西方部分で、およそ前4500年に開始され、ボタイ (Botai) に伝播した (ANTHONY 2007: 221)。ボタイでは、発掘された骨の99%がウマ、次いで、イヌであった (PETERSON *et al.* 2006: 92)。ボタイにおいて前3700-前3500年頃に生活形態を大きく変化して、新しい牧畜経済に変容した。野生ウマの一群を捕獲・死骸を運搬しており、集団も拡大した。この変化は、騎乗を考えないと説明が付かない (ANTHONY 2007: 220)。カザフスタン北部で、前3700-前3500年頃に、ウマは銜（ハミ）を付けて、騎乗された (ANTHONY 2007: 220)。前3500-前3000年頃には、ウマはマイコップにまで現れ出ていた。カザフスタンからコーカサス、ドナウ河沿岸、ドイツへとウマの重要性が増大していた。ウマに関して、前3500年以降、大きな経済的变化が生じていた。ステップ原産のウマが各地に拡散したが、これは、騎乗が始まったからである (ANTHONY 2007: 221)。これらのことから、前4200年頃にウマが家畜化され、前3500年前後から部族間の争いが活発になり、前1000年以降に、本格的な職業的軍隊が形成されて、メソポタミアなどの平野部に侵入したと考えられる。

ないが、騎乗すると、イヌ1頭の助力で、500頭のヒツジ群を管理できる (ANTHONY 2007: 222).
 そもそも、ヒツジやヤギならば、イヌの助けがあれば徒歩でも飼育可能であろうが、しかし、ウマの遊牧飼育は、騎乗なしには不可能であろう。

② ワゴン (Wheeled Wagon)

車輪という画期的な運搬手段が発明される前は、荷物を台車に載せて運ぶには、橇に乗せて運ぶほかはなかった。車輪が発明されて荷車に装備されたワゴンが開発されたのは、メソポタミアであり、前3500年頃にシュメール人が開発した (加茂 1980: 23)。つまり、先に見たように、騎乗がメソポタミアでウシやオナジャーに乗って始まり、ステップでウマに応用されたように、ワゴンもメソポタミアで開発されて、ステップに伝播し、やがてウマによっても牽引された。おそらくメソポタミアから後期マイコップ文化を經由して、ステップに伝播した (ANTHONY 2007: 63)³³⁾。ワゴンが、いつステップで出現したかは不明であるが、発掘された最古のワゴンは、前3100-前3000年であり、たぶん、それより200年くらい前に、ヤムナ文化が開始する前に使われ始めた。しかし、ワゴンを活用する遊牧形態が組織化されるには時間がかかり、かかる組織化が成功した暁に成立したのが、ヤムナ文化であった (ANTHONY 2007: 312)。

ステップでワゴンが普及した前3400-前3000年は、ちょうど緬羊がステップに拡散したのと同じ時期である (ANTHONY 2007: 66)。ワゴンは、ステップではウシだけでなく、ウマにも牽引させたが、いずれにしろ、ワゴンを牽引させるには、よく訓練された牡牛の一団を必要としたはずであった。その開発のおかげで、人口が凝集された村から、ステップにおける単一家族での生存が可能となった。前3500年頃以降、ステップ地帯へと人口が分散した。家財を車 (ワゴン) に積めるので、川沿いの生活圏からステップの奥へと進出して、家畜の飼養が可能になった。ステップ (それまで経済的には無価値) での大規模飼養が富の集積をもたらした。固まって集団でしか居住できなかったのが、ステップで散らばって生きていけるようになった (ANTHONY 2007: 72-73)³⁴⁾。

(4) 緬羊の普及と乳加工製品という、新資源

① 緬羊

33) メソポタミアでの車輪 (輻なし) は、マイコップ文化を通じて、ステップにもたらされた (ANTHONY 2007: 295)

34) 前期 PIE (原インド・ヨーロッパ語族民) 世界の東部であるドン・ヴォルガ・ウラル地域で、ワゴンの最大の効果が生じた。ヤムナ文化の最古のルーツがそこにある (ANTHONY 2007: 317)。家財道具を運ぶことがワゴンの有用性であり、「ワゴン+騎乗」によって、川縁から離れてオープンステップに繰り出せ、広大な草原の中で遊牧を営むことができるようになった (ANTHONY 2007: 300)。騎乗自体は、メソポタミア起源であり、ウシやオナジャーで開始した。しかし、ウマへの騎乗は、原インド・ヨーロッパ語族民の原故郷で開始した (ANTHONY 2007: 224)。ウマとワゴンとの結合によって急速な移動と生活物資の運搬が可能となり、遊牧が可能となった。ウマに騎乗することと覆われた荷車によって、生活に必要な資材を携えて、ステップでの生活を可能にさせた (ANTHONY 2007: 6)。

アンソニーによると、ヒツジの家畜化は前8000年頃（非常に早い推定。従来からの説では、前6500年頃）だが、それから4千年間、ヒツジは主に食用に飼育されており、繊維用のヒツジ（緬羊あるいはふわふわタイプのヒツジ）が出現したのは、前4000-前3500年である（ANTHONY 2007：59-60）。西アジア原産のヒツジが、アナトリアからヨーロッパへ伝播したのは前6500年頃である。

中型の群居性草食動物であるヒツジは性格が大人しいうえに、付和雷同性があるので、誘導羊などで管理がしやすい。しかし、ヒツジは、牧畜民にはあまり好まれなかった。ウシやヤギに比べて、乳があまり出ないからである。しかし、前期・原インド・ヨーロッパ語族民によるスレドニ・ストグ文化（前4400-前3400年）で、ヒツジはとうとう肉として活用されるようになった。ヒツジは、当初からフェルトのために飼われていたが、羊毛という単語がこの時期にPPIE（前期・原インド・ヨーロッパ語族民）の語彙に入ってきた（ANTHONY 2007：175）。

ヒツジやヤギの身体を覆う毛は、太さや柔軟性の異なる3種の繊維で構成されているが、ヒトが繊維として利用するのは、ウールと呼ぶ柔らかく細い下毛だけである。ウールを採取するために飼育されている現在のふわふわタイプのヒツジは、ウールをよく発達させるように改良された品種である。ウール・タイプのヒツジは、前3000年頃に文字記録として残っているので、それ以前に開発されたことは確実である（須藤 2008：99）。

羊毛用のヒツジは、時期的には、どうやらスレドニ・ストグ文化の末期に出現したらしい。中東での長い羊毛を持つ羊毛用ヒツジの出現は前3400年以降である。食用から羊毛用への遺伝子の変化は、寒冷なヨーロッパで起きたであろうが、しかし、ヨーロッパでの羊毛用ヒツジの飼育開始の時期はやはり中東と同じ頃であろう（ANTHONY 2007：61-62）³⁵⁾。羊毛用ヒツジの屠殺には特徴があるが、後期ウルク期（前3350年）以前にそれは見られない（ANTHONY 2007：61）。

35) 家羊、つまり、家畜化されたヒツジについては、加茂儀一の大著、『家畜文化史』（1973年）の825-901頁に詳細な記述がある。同書は、本文と索引を合わせて1100頁を超えるという大作であり、イヌ、ウマ、ヒツジなど、主要な家畜について、細部にまで蘊蓄が傾けられて、博覧強記の知見が披瀝されていて、徹底的に議論されている。家畜学には門外漢の筆者などから見ても、きわめて水準の高い学術書であり、手に取ったその重量感からしても、「加茂儀一、畢生の大事業」と言うほかない。しかし、筆者が知らないだけかもしれないが、残念なことに、この大著が家畜関係の諸論文で引用されることはあまりないように思われる。理由の第一は、おそらく、各頁にめくるめくほど提示されている言説の一つ一つに注が付けられていないために、読者が原典にまで遡及して確認することが難しいので、自論文に引用することにためらいが生じるからではないか。もちろん、加茂儀一にしてみれば、注を付けることなど朝飯前の仕事であり、できない作業だったはずはない。ノートを見れば良いのだから。しかし、注など付け始めれば、それこそ本自体がさらに一層巨大な分量になり、コストの面から出版自体を諦めざるをえなかったであろう。そして、この大著が看過されている（ように見える）第二の理由が、日本語で書かれていることである。もし英文で書かれていれば、欧米の学会で書かれる諸論文には、必ず記載してもらえたのではないか。いずれにしろ、この名著がこのまま忘却の彼方に消えゆくとなれば、非常に嘆かわしいことである。なお、クラットン・ブロック（1989）『図説動物文化史事典—人間と家畜の歴史』には、ヒツジに関する簡便な記述（82-92頁）がある。

大量の家畜を飼って羊毛を商品として生産するには、焼き畑農業と同じように、人口希薄な地域に進出した方がいい。それゆえ、半農半牧であった原インド・ヨーロッパ語族民が、積極的にステップに進出して、そこで遊牧を開始したのである。それまで未開の地であった大河の間のステップがその条件を満たした。初期青銅器時代にはステップ周辺の未開の地に放牧されていたが、その後、ワゴンが大いに活用されるようになると、広大なステップの中に生活用品を抱えて分け入ることができるようになった。かくて、中期青銅器時代には、ステップでの遊牧が盛んになり、商品経済が発展し、ステップでの富の集積も進んだ。羊毛用ヒツジは、前3600-前3200年頃までに、ドナウ川中流域、オーストリア、モラビア、エーゲ海沿岸にまで拡散した。前3600年頃までには、ヨーロッパ東部では、ウマとウール用のヒツジは普通に見られるようになった。それ以降、東ヨーロッパでも急速に増加した（ANTHONY 2007：261-262）。

ドニエプル川からドナウ川下流域に形成されたウサトヴォ文化（前3500-前2500年）において、ヒツジが大量に飼養され、ドニエプル中流域・ドニエプル流域の台地では紡績・織布が盛んになった。台地の織工たちがステップから持ち込まれたヒツジの毛を織っていた。ウサトヴォでは、ウマが、遊牧・騎乗・襲撃・商品として、非常に重要な役目を果たした（ANTHONY 2007：351）。前3500-前3000年頃に、（ドン・ボルガ川・カザフ）ステップは寒冷・乾燥化したが、前3300-前3100年頃にかけて、大量の綿羊を引き連れたワゴンがギシギシ音を立ててステップを横切る光景が普通になった（ANTHONY 2007：300）。

羊毛用ヒツジに関する上記の議論はきわめて示唆的である。原インド・ヨーロッパ語族は、まず羊毛用ヒツジの大量飼育を前4000年頃に開始した。これが彼らの自己形成に繋がった。しかも、羊毛用ということは、初めから売ることを、すなわち、商品として生産することを目的としていた。乳の生産であれば生存のためであるが、それならばヤギを飼ったはずである。原インド・ヨーロッパ語族民は、その自己形成期にはヒツジを飼い、食糧源としては、乳をふんだんに供給してくれるウシ（あるいは、ヤギ）を、定住地で飼い始めていた。

メソポタミアでの都市集落の発展によって、都市人口が増加し、衣服・シーツ用など、繊維製品への需要が拡大すると、その新規の需要に応えるためにも、綿羊（あるいは、ウール・タイプのヒツジ）を大量に飼育して、都市にウールを供給することは、十分に理に適っていた。ステップのような広大で人口が極端に少ない地域でヒツジを大量に飼育することは、経営環境の選択という点ではきわめて合理的である。後に原インド・ヨーロッパ語族と呼ばれる人々が、ステップに目を付けて、前3200年頃までには綿羊の大量飼育という遊牧が実現していた。ステップでの綿羊の大量飼育に乗り出したことは、技術的にも、経営面でも、すこぶる革新的であった。彼らがヒツジを飼育したのは、自分たちの食糧源にするためではなかった。あくまでもウールを採取して、商品として南方の都市へと売りさばくという、商品生産であった。

② 乳加工製品の恒常的確保

腐りやすい乳を、適切に加工することで長期保存食ができた。先きに見たように、そのおかげで家畜をむやみに殺さずに長期間、ステップという乾燥草原地域で遊牧という生業を実施することが可能となった。

(5) 《牧夫→仲介者→家畜群》という、新組織

遊牧によって形成された組織は、二重の意味で非常に特異であった³⁶⁾。

第一は、「城壁なし、少人数、全財産を携行」という、環境面からの特異性である。主として農耕で生計を立てている場合、できるだけの大人数で集落を形成し、集落の周囲に頑丈な防護壁を建設して安全を確保することに努める。しかし、広大な草原地帯では、身を守るには物的な防護壁は存在しない。しかも、遊牧の性として、家畜群を草原の中に遊動して飼育している最中は、牧夫とその家族という核家族が人員構成としては基本である。大規模の組織人数を遊牧生活では抱えることは適わないのである。すなわち、組織単位はごくごく少人数になってしまうので、防衛には非常に不利である。しかも、家畜群が全財産であるが、その全財産を持ち歩いていることになる。遊牧民は、全資産の保全と何よりも自己の家族の生命の防衛にとってきわめて危険な状況に置かれることになる。

そこで、遊牧では、牧夫とその家族という核家族が、一個、ぼつんと草原の中で遊牧に従事しているのではなく、防衛のために、意図的に組織化に努める。平常時に核家族がポツンと行動しているように見えているが、しかし、その実、緊密な味方関係を構築している。遊牧民として、彼らは意識的・意図的・積極的な同盟関係を構築する必要があり、氏族から部族へと組織を編成し、拡大を目指した。この際に有効な方法が、もちろん、第一に疑似親族原理による同盟であったが、しかし、それと同時に、第二に、Patron-Client Relationship（主人・従者関係）によるよそ者同士の同盟関係が構築された。原インド・ヨーロッパ語族民の生成において、かかる特異な関係こそ、きわめて特徴的な組織編成方法であった。

前3500年前後の分水嶺を経て、彼らは川縁を離れて、広大なステップでの遊牧が可能となった。その分だけ大量のヒツジを飼育可能になったが、氏族（clans）同士で互いに受諾可能な協定を結んだことが、ヤムナ文化の特徴でもあった（ANTHONY 2007：300）。比較的狭い領域に限定されていたそれまでのスレドニ・ストグ文化から広大なステップへと展開できた秘密は、ステップで暮らすための相互に了解する社会的な規範の形成・仕組みの構築であり、後期・原インド・ヨーロッパ語族民の成立には、一連の特異な社会関係が効果的であった。

36) 本節での議論は、原インド・ヨーロッパ語族民が遊牧を開始したことで、組織編成原理史上、いかに重要な変革を実現したかを展望しているが、典拠も示さず、きわめて粗雑な議論になっている。このテーマでは別稿を準備中であるが、議論の大枠は、すでに拙著（中川 2017d：64-83）で提示されているので、ご参照いただければ幸いである。

遊牧によって形成された組織の第二の特異性は、牧夫が数百頭の家畜を引き連れてステップを遊動する全体を1個の組織として見ると、そこには、ヒト（牧夫とその家族）以外に、非ヒトである一群の動物を抱え込んでいたことである。牧夫とその家族は、もちろんヒトであるが、彼ら以外に、数百頭の家畜群（例えば、ヒツジ）を帯同している。遊牧民が飼育するのはヒツジやヤギなどの群居性草食動物であるが、しかし、家畜の大群をヒトが自由に動かすことは至難の業であり、通常は、「助っ人」として、牧夫の意志に従って、ヒツジなどの家畜群を統御するための動物が随伴している。これら家畜群管理の「助手」を、欧米の研究者たちは、牧夫の意志を家畜群へと仲介する役割を果たすので、「仲介者」と呼んでいる。《仲介者》には、大きく二種類の動物がいる。ヤギあるいは去勢ヒツジなど、家畜群と出自が同じ動物と、イヌという、もともとヒツジの捕食者であった動物である。

ヒトはその出現以降、長期間、疑似親族原理によって組織を構成してきた。つまり、それまで親族と、もともとはよそ者であったがその集団の掟に従ってこの親族組織に融合して疑似親族になった人々によって、組織をつくってきた。筆者の考えでは、遊牧開始によって生成した《牧夫→仲介者→家畜群》という「三階級構造」は、異質なメンバー（ヒツジやイヌなどの非ヒトの動物）をそのまま異質なメンバーとして組織に内包した初めての組織である。どうあがいてもヒツジやイヌがヒトになることはないからである。この組織では、よそ者を手間暇かけて疑似親族へと変える必要はなくなった。それどころか、この遊牧民が創成した組織では、「他民族や他部族などのよそ者は、ヒツジと同じ家畜だ」という認識を懐けば、「よそ者をよそ者として抱え込む仕組み」を入手したことになる。筆者の仮説では、これこそが、人間の歴史において、疑似親族原理から新しい原理原則（筆者は機能本位原理と呼んでいるが）の生成の瞬間ではないかと考えている。

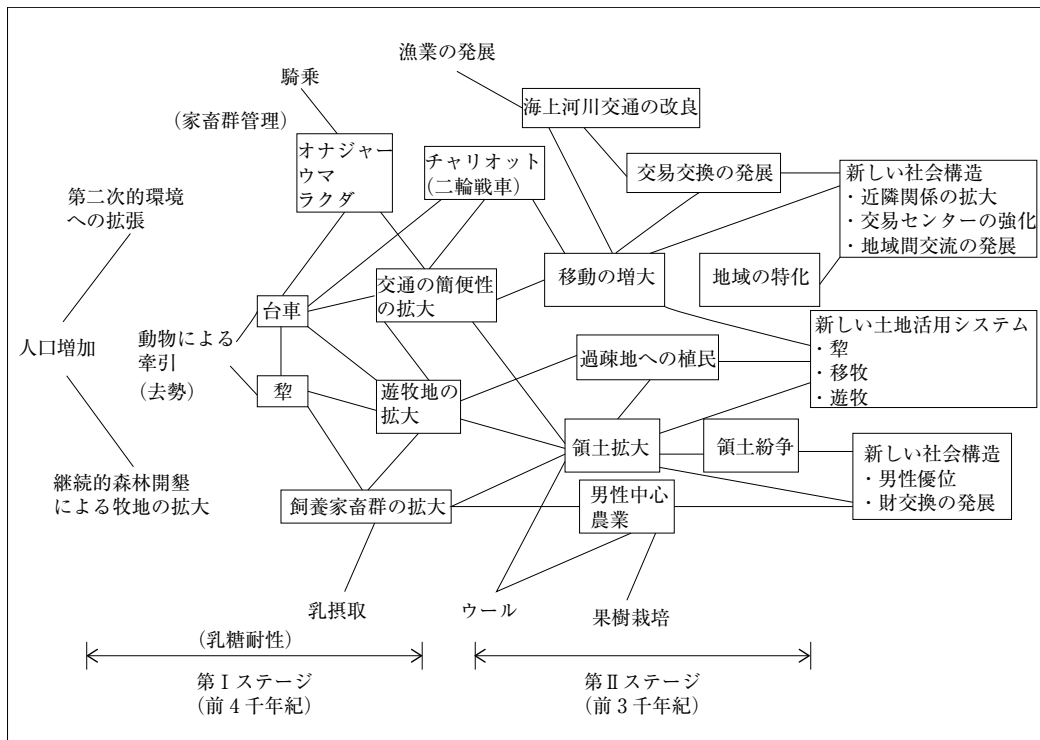
V. 前4千年紀半ばを分水嶺とするステップ遊牧経済の展開

1. 《第二次生産物革命》とステップへの進出

1981年と1983年に発表した論文で、アンドリュー・シェラートが《第二次生産物革命》(*The Secondary Products Revolution*)を定式化した。その概略が図2に描かれている。彼の議論では、動物の家畜化の当初の目的は、まず何よりも、肉であり、これを第一次生産物と命名した。この第一次生産物は、動物の死によって、つまり、その生涯に一度しか獲得できない生産物、つまり、肉・皮・血・骨を指している。この第一次生産物を獲得するための家畜化は、新石器時代の前6500年から前6000年頃に実現した。やがて、この動物活用方式は、乳・ウール・繊維、および、牽引力や交通動力などの応用など、第二次生産物を得るための多様な活用方式によって置き換えられた。第二次生産物は屠殺なしに得られるし、その動物が生きている限り、繰り返し活用できるという性格を持っている。歴史的な遺物としては、メソポタミアにおいて、銅器時代（または、金石

併用時代)のおよそ前5000年頃、毛の長いヒツジのレリーフや彫像、少し時代は下るが、前4000年頃、動物による犁の牽引と、ウシとヒツジの搾乳の証拠が残っている。およそ前3500年頃には、近東においてウールと乳のために動物飼育をしていることが楔形文字で粘土板に記されているし、荷車 (carts) と軛を付けられたウシ (yoked cattle) のモデルが近東とヨーロッパの遺物として残っている。およそ前3000年頃のものとして、ウール繊維、ウシ用の頸木、木製の鋤 (簡易な犁)、木製の乗物、水没・埋没遺跡での犁址などが、東・中央・北ヨーロッパで発見されている。つまり、家畜化開始からおよそ2000年から3000年ほど経過した前3500年頃に《第二次生産物革命》の一連のイノベーションが揃った。銅器時代以前にこれほど広範な規模で第二次生産物革命の考古学的な痕跡が残されている地域は、これら西アジアとヨーロッパ以外には存在しない (SHERRATT 1981 : 1983)³⁷⁾。

図2 《第二次生産物革命》の諸側面



(原注) 西ユーラシアにおける第二次生産物の各要素間での交互作用を図式化した。
 地域の特性を示しているのではなく、西ユーラシア全体の一般的概観を提供していることに注意。
 出所) SHERRATT (1981 : 185) をもとに、筆者が翻訳して作成した。

37) 「《第二次生産物革命》(前3500-前3000年)がヨーロッパ社会を震撼させた。第一次生産物(肉・骨・血・獣皮など、殺さないで得られない産物)に対して、第二次生産物(ウール・乳・動力など、生かされたまま

つまり、《第二次生産物革命》によって、上記のような一連の乳製品利用関連技法が開発されたので、ヒトが家畜の乳によって生活を送ることが可能になった。かかる乳製品の恒常的取得が実現して、ステップにおける安定的な食糧資源獲得が可能となったので、広大なステップでの遊動生活（という、新生産技術）が実現した。このことは、広大な草原の中へヒトが進出し、長期間滞在して、遊牧を営むことが可能となったことを意味している。

2. 前5千年紀から前3千年紀にかけてのステップ遊牧経済の変遷

先史時代、前3500年前後の数千年間を対象にユーラシア・ステップにおける四つの遊牧経済モ

表2 前4千年紀から前2千年紀、黒海ステップにおける経済モデル
—ユーラシア・ステップにおける家畜飼養の4モデル—
(植物相と表層土壌という環境要因と関連して)

1. ミスシンスク・ステップ・モデル
アフアナシェヴォ・オクネヴォ文化 ウシ（ウシ飼養） 毛皮用獣の狩猟 おそらく、完全定住ではなかった。
2. ヴォルガ・ウラル・ステップ・モデル
ヤムナ文化 小型家畜（ヒツジ飼養） 遊牧経済（季節的遊牧）
3. 北コーカサス・モデル
マイコップ文化 ウシ、ブタ 定住してのウシ・ブタの飼養 おそらく、山と麓の間の移牧
4. 北黒海ステップ・モデル
a) スレドニ・ストグ文化Ⅱ レピン、デレイフカ。 ウマ飼養 定住生活（ステップ北方と森林ステップ）
b) ミカイロフカⅡ・Ⅲ、リーヴェンツォフカ など。 ウシ飼養 定住生活（川沿いの渓谷）
c) ヤムナ文化 ヒツジ飼養 遊牧経済（オープンステップ地域）

出所) RASSAMAKIN (2006: 451)。なお、ラサマーキンは、シーロフの1975年のロシア語論文を出典に挙げているが、筆者は未確認である。

ま獲得できる産物）という意義づけがあり、家畜を殺さずに資料を得るという大きな利点を得た。すべて中東が発祥の地のように見えるが、しかし、真の震源地が中東なのか、ヨーロッパなのかは、どこで開始されたのか、正確には不明である」(ANTHONY 2007: 73)。

デルが提起されている。これは、ラサマーキンが、シーロフの1975年の論文をもとに作成したものであるが、きわめて興味深い分類なので、ここに表2として紹介してみよう。

ラサマーキンによれば、シーロフが提示した「黒海ステップにおける遊牧経済」の4モデルを時系列的に整理すると、まず第1モデルは、ウマ飼養ステップ経済であるスレドニ・ストークⅡ文化（前4500-前3500年）であり、同文化民たちはステップの北方領域と森林ステップに定住していた。スレドニ・ストグⅡ文化では、まだ大量のヒツジ飼養には到っていなかったようであるが、定住民であったことが特筆される。このスレドニ・ストグⅡ文化が終了する前3500年前後までに、《第二次生産物革命》で挙げた乳加工製品の開発の他に、一連のイノベーション（ウマへの騎乗、ワゴンなど）が進行していて、ステップの奥地まで行動範囲が広がった。その結果、遊牧民として、オープンステップ地域へと進出できるようになった。

スレドニ・ストグⅡ文化の後には、第2モデルとして、マイコップ文化（前3700-前2500年）がウシ・ブタ飼養ステップ経済として成立し、農牧民として定住生活を送っていた。

次いで、本格的な原インド・ヨーロッパ語族民として、ヤムナ文化（前3600-前2200年）が、第3モデルとして、生成し、ヴォルガ川とウラル山脈との間に広がる広大な草原地帯で、特筆すべきことに、ヒツジの飼養を行った。

カスピ海東およそ3000kmにある南部シベリア・ミスシンスク盆地で、第4モデルとして、アフアナシェヴォ文化（前3300-前2500年）がウシ飼養経済として成立した。

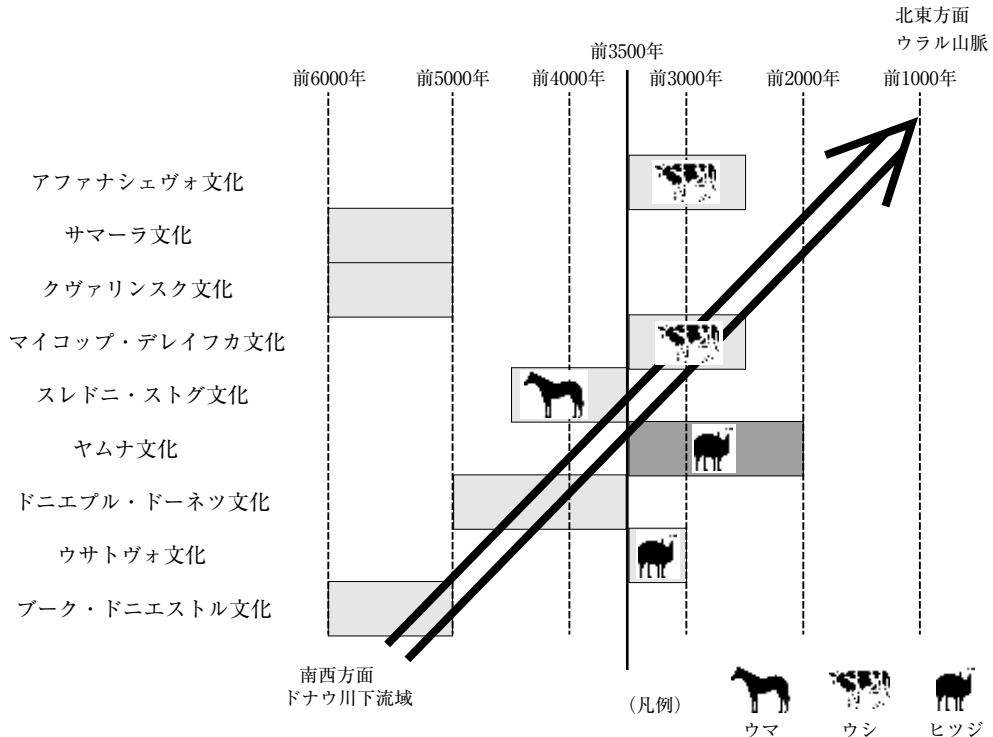
3. ヤムナ文化の意義

原インド・ヨーロッパ語族民の本格的な生成の舞台となったヤムナ文化の意義を図式化してみたのが、図3「ポントス・カスピ海ステップにおける遊牧民諸文化の展開—前3500年前後の分水嶺—」である。この図では、ポントス・カスピ海ステップにおける前5千年紀から前1千年紀の5千年間に渡る狩猟採集民・遊牧民系の諸文化の消長を大まかに表象化することを試みている。図中の動物のイラストは、当該文化の代表的な家畜を、また、⇒（矢印）は、各文化の南西方面から北東方面へのおおよその位置配置を表している。

前3500年前後の分水嶺以前の諸文化、例えば、ブーク・ドニエストル文化（およそ前6300-前5500年）では、狩猟採集民が、狩猟採集の傍ら、パートタイム的に穀物耕作・マメ栽培・家畜飼養を実施していた。定住化傾向は強まっていたようだが、半定住文化で、依然として遊動生活が維持されていた。これに対して、前3500年以降には、ヤムナ・マイコップ・ウサトヴォ・アフアナシェボの一連の本格的な牧畜経済文化が並んでいる。中でも結節点となっているのが、スレドニ・ストグ文化（およそ前4400-前3400年）である。

スレドニ・ストグ文化は、川縁などの比較的狭い場所に拠点を設けていたが、文化全体の広がりも、比較的狭い範囲で形成していた。ウマの家畜化と騎乗がその特徴であった。スレドニ・ス

図3 ポントス・カスピ海ステップにおける遊牧民諸文化の展開—前3500年前後の分水嶺—



出所) 各種資料より、筆者作成。各文化のおおよその年代と南西から北東へと延びる矢印によって、各文化のおおよその地理的配置を示している。図中の家畜のイラストは、それぞれの文化における代表的な家畜(ウマ、ウシ、ヒツジ)を示している。ウマの飼養を特徴とするスレドニ・ストグ文化が起点となって、前3500年前後の分水嶺以降、ヤムナ文化(強調されている)を中心に、広範なステップでのヒツジ飼養遊牧が展開したことを示している。

トグ文化の末期、前3500年頃までに、イノベーションが次々と群生的に出現して、ステップでの生活に適用されたので、経済的に大きな変革があった。

かくて、羊毛用ヒツジ(綿羊)の飼育を生業として、ワゴンによって、移動力が飛躍的に向上し³⁸⁾、そのうえ《第二次生産物革命》によって乳加工製品が恒常的に入手できるようになった。これらのイノベーションのおかげで、広大なステップ地帯での単一家族による大規模な家畜群の飼養が可能となった。その結果として大量生産されたウールを遠くメソポタミアの人口集積地域へと搬出するという、きわめて商業的色彩の濃い遊牧民文化が誕生し³⁹⁾、黒海カスピ海北方ステップ

38) 前3300年頃、ワゴンの開発によって牧畜経済が拡張した。それまでヤムナ牧畜民の行動範囲は年間でも50kmであったが、たくさん荷物を運べるワゴンと素早く移動できる騎乗との組み合わせによって、ステップは大胆に開発された。話し手が激しく移動するに連れて、インド・ヨーロッパ語の各言語の種が蒔かれた(ANTHONY 2007: 461)。

39) ちょうど同時期(前3300-前3200年)にCycladic Islands(キクラデス諸島)での航海者たち(Grotta -

でのヤムナ文化世界が拡張した。これが、後期・原インド・ヨーロッパ語族民であった⁴⁰⁾。

以上のように、植物相と表層土壌をもとに構想された遊牧経済モデルに関する上記のシーロフ説が正しければ、スレドニ・ストグ文化が起源となって、その影響が後続のステップにおける諸遊牧経済の形成に及び、ヤムナ文化などの本格的な原インド・ヨーロッパ語族民の生成に結びついたのである。

おわりに——遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成——

原インド・ヨーロッパ語族民の生成の地は、黒海・カスピ海の北方に広がる広大なステップだが、そこには野生のウマが棲息していた。彼らが、前3千年紀の初めまでにウマの家畜化に成功していたことが大きい意味を持った。ウマは家畜の中でも、その大きさ、牽引力や移動速度、人との親近性などの点で、ヒトにとって、他の家畜では得がたい、かけがえのない利点を持っているからである。また、原インド・ヨーロッパ語族民の《原故郷》は、もともとバルカン半島南部やコーカサスに近かったので、他の遊牧民と比べて、メソポタミア発祥の先進文明に、比較的容易に接することができた。他の遊牧民よりも有利な地理的環境のおかげで、原インド・ヨーロッパ語族民は、メソポタミアで行われていたウシやロバなどの騎乗や車輪などの先進技術をいち早く享受できた。

つまり、原インド・ヨーロッパ語族民は、自らが家畜化に成功していたウマと、メソポタミア発祥の技術革新を結びつけて、ウマへの騎乗、ウマによる荷車の牽引を実現した。やがて、ヤムナ文化の真っ盛りの時期には、騎乗（乗馬）・重量ワゴンとカートの開発・スポーク付き2輪チャリオット（戦車）の発達などが、機動力と輸送力で大きな威力を発揮して、メソポタミアにおける巨大な人口集積という市場における毛織物への需要増加という、新規の市場動向に適応できた。それまで、ユーラシアにおいては諸文化が相対的に自立し、いわば分離・隔絶していたが、ウマが動力源となった交通・輸送の一大変革が起きることで、諸文化が相互に影響を及ぼす単一の、より均質的な世界へと変わり始めた。

原インド・ヨーロッパ語族民が遊牧を始めた時、彼らは追い詰められて仕方なくステップへ逃

Pelos) が多数の櫂を持つ船の文化が発展した。ステップの緬羊遊牧民たちは、おそらく彼らと黒海沿岸で出会ったであろう。つまり、前3500年を境に出現した黒海を跨いだステップと海の交流・相互影響が想定されている (ANTHONY 2007: 336)。

40) 前4000年以前に（おそらくは、前3500年以前に）、ウール製品もワゴンも存在していなかった。しかし、前3500年以降、原インド・ヨーロッパ語族民は、ワゴンと羊毛繊維について普通に話していた。このことから、原インド・ヨーロッパ語が話され始めたのが、前4000-前3500年以降かと推定される (ANTHONY 2007: 59)。原インド・ヨーロッパ語族民の本格的な生成については、前4千年紀前半、つまり、本稿で言う《前3500年前後の分水嶺》の前あたりというのが妥当なところか。

避したのではない。遊動的な生活を送りつつ、いくつか拠点を持ってパートタイム的に農耕を続けながら、時折草原に出て小動物を狩るとか、川で魚を捕るとか、森で果実を採集するなど、狩猟採集に勤しんでいれば、生活は成り立っていた。川の近傍など、それまで生活してきた生存圏に比べて、食糧欠如・水不足という、環境条件が劣悪なステップに出て行って、苦しく危険な遊牧をやる以外に退路を断たれていたわけではなかった。従って、彼らがいくつものイノベーションを「新結合」して、あえてステップでの遊牧を開始したのは、意図的な「起業」活動であり、積極的な投企活動であった。

ヨーゼフ・シュンペーターは、経済発展を企業活動という側面から見ていた。彼の理論は全面的な発展を遂げた現代における市場経済を前提にした議論であるので、農耕が始まったばかりで、市場も未発達な6千年前の初期農耕文明には、当然ただちには適用できないであろう。しかし、原インド・ヨーロッパ語族民がステップへの果敢な投企活動を実施するには、上記のようないくつかのイノベーションが裏付けとなっていた。現代風に言うと、ステップでの遊牧（特に、綿羊飼育）開始は、リスクを取って果敢に新規事業に打って出るといふ、積極的な「起業」活動であった。

通常の日常的な企業活動であれば、所与の環境条件の変更をもたらさないが、しかし、原インド・ヨーロッパ語族民によるステップでの綿羊の大量飼育は、後の世に対して、経済的にも社会的にも決定的な影響を与えた。なぜなら、原インド・ヨーロッパ語族民によるステップで遊牧開始は、組織編成原理史上の分水嶺となったからである。

まず、原インド・ヨーロッパ語族民は、《牧夫→イヌ→家畜群》という、（当時としては）非常に特異な特徴を持つ集団を組織化していた。このヒトと非ヒトからなる集団において、いわば暴力によって組織の秩序を維持していたのが、《仲介者》たるイヌであった。暴力によって家畜群を管理するという、ヒトには能力的に不可能な機能を遂行させるために、牧夫は、「ヒツジの捕食者」としてのイヌの能力に目を付けて、外部からイヌを《仲介者》として「採用」したのである。ここに、まず機能を先行して確定して、その後に、その機能を果たすのに最適の人材を登用するという、機能本位原理の生成を見ることができる。

そして、何よりも、彼らは、それまでの基本的な組織原理であった疑似親族原理に対比して、彼ら自身の初期遊牧組織の特異性を見てとり、そこから機能本位原理を抽出して、彼らの世界観をイデオロギー（社会についての共有観念体系）として練り上げた。《三機能イデオロギー》という彼らの信念は、「世界は三つの階級からできており、われわれが主権者として、その全体を支配し、統括する」といふ、世界の成り立ちに関する共有信念である。同時に、この共有信念はイデオロギーとして、現実へと適用されるべきものであった（中川 2018c）。

彼らの神話に見る《三機能イデオロギー》こそ、彼らがかかるといふ特異な組織から会得した機能本位原理の反映ではなかったかと思う。自分たちが主権を握って組織を編成するという信念は、こ

の世界に関する集団的観念、つまり、イデオロギーとして部族民の集団的な共有観念となった。かかる組織統合原理の獲得によって、彼らがステップから出て、周辺の農耕定住民である他部族・他民族と接した時、平時には大人しくしていて友好的であったかもしれないが、しかし、いざ絶好の機会と見るや、彼らを征服して、支配体制を構築しようとする時、征服した定住民をいわば家畜として扱い、自分たちが牧夫となる（すなわち、自らが主権者の地位に就く）ような組織を編成して、支配体制を構築するのは、成り行きのおかげで至極当然であったと言うべきであろう。

参考文献

- 稲村哲也（2014）『遊牧・移牧・定牧—モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから—』ナカニシヤ出版、390。
- 禿 仁志（1983）「セトルメント・タイプとしての移動牧畜民のキャンプ址—現代イラン遊牧民の考古学的研究の試み—」『アジア・アフリカ言語文化研究』25：217-232。
- 加茂儀一（1973）『家畜文化史』法政大学出版局、1058、84。
- （1980）『騎行・車行の歴史』法政大学出版局、268。
- 川又正智（2005）「馬の家畜化をめぐる研究動向」『国士舘大学文学部人文学会紀要』37：141-153。
- ギンブタス、マリヤ（1998）『新装版 古ヨーロッパの神々』（鶴岡真弓訳）言叢社、323。
- クラットン・ブロック、J.（1989）『図説動物文化史事典—人間と家畜の歴史』（増井久代訳）原書房、333、xxiv。
- （1997）『[図説] 馬と人の文化史』（桜井清彦監訳・清水雄次郎訳）東洋書林、285、x。
- 黒河 功（1992）「近年の中国乾燥地域における遊牧経営」『農業経営研究』18：107-127。
- ゲレルマー、ダナー・佐々木隆（2008）「モンゴルにおける牧畜経営規模についての一考察」『農林業問題研究』44（1）：238-243。
- 小泉龍人（2001）『都市誕生の考古学』同成社、244。
- 湖中真哉（2006）『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプル民族誌的研究—』世界思想社、322。
- 小松久男編（2000）『中央ユーラシア史』山川出版社、456、95。
- サウアー、C. O.（1981）『農業の起原』（竹内常行・斎藤見吉訳）古今書院、184。
- 坂内徳明（2011）「リトアニア人考古神話学者マリヤ・ギンブタスの仕事—生命の木と蛇に憑かれて—」『言語文化』48：69-91。
- 佐藤 俊（1995）「遊牧社会と市場経済—東アフリカの事例から—」秋道智彌ほか編『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社、111-130。
- 志賀永一（2005）「モンゴル遊牧研究のための調査基礎資料：トゥブ県バヤンツァガン郡の指導者からの聞き取り」『農業経営研究』31：167-177。
- シュンペーター、ヨーゼフ（1980）『経済発展の理論』（塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳）岩波書店、546、17。
- 末崎真澄（1993）「美術・考古資料に見る古代の騎行・車行」*Japanese Journal of Equine Science.*, 4（1）：1-23。
- 須藤寛史（2008）「羊毛のドメスティケーション—ウールの発達と紡錘車—」西秋良宏編（2008）『遺丘と女神—メソポタミア原始農村の黎明—』東京大学出版会、94-102。
- 谷 泰（1976）「牧畜文化考—牧夫—牧畜家畜関係行動とそのメタファー—」『人文學報』42：1-58。
- （1987）「西南ユーラシアにおける放牧羊群の管理」福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の現像—生態・

- 社会・歴史—』日本放送出版協会, 147-206.
- (1992) 「家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味—」『人文學報』71: 53-96.
- (1995) 「家畜去勢と人間去勢—その機能と文化地理的意味—」『大航海』7: 17-23.
- (1997) 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』平凡社, 396.
- (2010) 『牧夫の誕生—羊・山羊の家畜化の開始とその帰結—』岩波書店, 224, 12.
- 田名部雄一 (1991) 「〈研究展望〉ヒトと他の動物との共生の歴史」『日本研究』5: 135-172.
- 千本真生 (2010) 「ブルガリア・トラキア地方における前期青銅器時代エゼロ文化の系譜と成立—主に土器装飾を手がかりにして—」『西アジア考古学』11: 1-21.
- トインビー, A. J. (1970) 『歴史の研究 第6巻』(「歴史の研究刊行会」訳) 経済往来社, 389.
- 中川洋一郎 (2017a) 「地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義—文明の(だが、同時に環境破壊の)起源としての遊牧—」『経済学論纂(中央大学)』57(3・4): 333-362.
- (2017b) 「群居性草食動物家畜化の衝撃—輪廻転生観の破壊という、人類史上の分水嶺—」『経済学論纂(中央大学)』57(5・6): 257-284.
- (2017c) 「フランスにおける職務間の『隙間』—1990年代初頭、現地日系メーカー日本人幹部による評価—」『中央大学経済研究所年報』49: 435-458.
- (2017d) 『新ヨーロッパ経済史Ⅰ—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, 243.
- (2017e) 『新ヨーロッパ経済史Ⅱ—資本・市場・石炭—』学文社, 293.
- (2018a) 「プラトン《魂の三分区》説とデュメジル《三分区イデオロギー》説—インド・ヨーロッパ語族民における歴史通貫的な統治原理—」『経済学論纂(中央大学)』58(3・4): 313-342.
- (2018b) 「フランスの職務個別化と日本の職務共有化—1990年代初頭、現地日系メーカー日本人幹部による評価(2)—」『経済学論纂(中央大学)』58(5・6): 287-319.
- (2018c) 「ジョルジュ・デュメジル《三機能性》論, 1950年の蹉跎—神話形成期(前4千年紀), 原インド・ヨーロッパ語族民組織における社会的三階級の不在という難題—」『経済学論纂(中央大学)』59(3・4): 399-433.
- 西秋良宏編 (2008) 『遺丘と女神—メソポタミア原始農村の黎明—』東京大学出版会, 186.
- 野沢 謙 (1987) 「家畜化の生物学的意義」福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の現像—生態・社会・歴史—』日本放送出版協会, 63-107.
- (1992) 「東亜と日本在来馬の起源と系統」*Japanese Journal of Equine Science*, 3(1): 1-18.
- 平田昌弘 (2013) 『ユーラシア乳文化論』岩波書店, 450, 35.
- 平野秀樹・堺正紘 (1995) 「古代都市文明と森林化狩猟採集に関する考察」『九州大学農学部演習林報告』72: 169-183.
- 福井勝義・谷泰編著 (1987) 『牧畜文化の現像—生態・社会・歴史—』日本放送出版協会, 617, XXXVI.
- 藤井純夫 (1999) 「『群れ単位の家畜化』説: 西アジア考古学との照合」『民族学研究』64(1): 28-57.
- (2001) 『ムギとヒツジの考古学』同成社, 344.
- 藤川繁彦編 (1999) 『中央ユーラシアの考古学』同成社, 366.
- ベルウッド, ピーター (2008) 『農耕起源の人類史』(長田俊樹・佐藤洋一郎監訳) 京都大学学術出版会, 560.
- 甫尔加甫・黒河 功 (1994) 「中国遊牧経営の展開過程に関する研究—1—新疆北部におけるアウル組織の意義とその変遷」『農経論叢』50: 131-150.
- (1995) 「中国遊牧経営の展開過程に関する研究(2)—合作社段階におけるアウル組織の変容—」『北海道大学農経論叢』51: 25-35.
- 本郷一美 (2002) 「狩猟採集から食料生産への緩やかな移行—南東アナトリアにおける家畜化—」佐々木

- 史朗編『国立民族学博物館調査報告33 先史狩猟採集文化研究の新しい視野』国立民族学博物館, 109-158.
- マシクール, マルジャン, ジャン=ドニ・ヴィーニュ, 西秋良宏 (2008) 「西アジアにおける動物の家畜化とその発展」西秋良宏編 (2008) 『遺丘と女神—メソポタミア原始農村の黎明—』東京大学出版会, 80-93.
- 松井 建 (1989) 『セミ・ドメスティケーション: 農耕と牧畜の起源再考』海鳴社, 244.
- (2001) 『遊牧という文化: 移動の生活戦略』吉川弘文館, 5, 213.
- 松原正毅・小長谷有紀・楊 海英 (2005) 『ユーラシア草原からのメッセージ—遊牧民研究の最前線—』平凡社, 395.
- 松本圭太 (2015) 『ユーラシア草原東部における青銅器文化の研究』九州大学大学院比較社会文化学府, 166.
- ANTHONY, David W. *et alii*. (1986) “The “Kurgan Culture,” Indo-European Origins, and the Domestication of the Horse: A Reconsideration [and Comments and Replies]”, *Current Anthropology*, 27 (4): 291-313.
- ANTHONY, David W. (1995) “Nazi and eco-feminist prehistories: ideology and empiricism in Indo-European archaeology”, *Nationalism, politics, and the practice of archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2007) *The Horse, the Wheel, and Language: How Bronze-Age Riders from the Eurasian Steppes Shaped the Modern World*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 553.
- BELLWOOD, Peter (2004) *First Farmers: The Origins of Agricultural Societies*. Blackwell Publishers. 360.
- BERNOT, Lucien (1988) “Buveurs et non-buveurs de lait”, *L’Homme*, 28 (108): 99-107.
- GIMBUTAS, Marija (1993) “The Indo-Europeanization of Europe: the intrusion of steppe pastoralists from south Russia and the transformation of Old Europe”, *World*, 44 (2): 205-222.
- ITAN Y., A. POWELL, M. A. BEAUMONT, J. BURGER, M. G. THOMAS (2009) “The Origins of Lactase Persistence in Europe”, *PLoS Comput Biol*, 5 (8).
- LEONARDI, Michela, Pascale GERBULT, Mark G. THOMAS, Joachim BURGER (2012) “The evolution of lactase persistence in Europe. A synthesis of archaeological and genetic evidence”. *International Dairy Journal*, 22 (2): 88-97.
- LEVINE, Marsha A. (1999) “Botai and the Origins of Horse Domestication”, *Journal of Anthropological Archaeology*, 18: 29-78.
- MALLORY, J. P. (1989) *In search of the Indo-Europeans: language, archaeology and myth*. London: Thames and Hudson. 288.
- OUTRAM, Alan *et alii*. (2009) “The Earliest Horse Harnessing and Milking”, *Science*, 323 (5919):1332-1335.
- PETERSON, David L., Laura M. POPOVA and Adam T. SMITH eds. (2006) *Beyond the Steppe and the Sown. Proceedings of the 2002 University of Chicago. Conference on Eurasian Archaeology*, 509.
- RASSAMAKIN, Yuri (2006) “Cultural Transformations in the Black Sea Steppe between the Eneolithic and Bronze Age: Migrations or Economic Changes?”, In: D. L. PETERSON *et alii*. *Beyond the Steppe and the Sown. Proceedings of the 2002. University of Chicago. Conference on Eurasian Archaeology*. 448-458.
- SHERRATT, Andrew G. (1981). “Plough and pastoralism: aspects of the Secondary Products Revolution”. In: *Pattern of the Past*, Edited by I. HODDER, G. ISAAC, and N. HAMMOND, 261-306. Cambridge: Cam-

bridge University Press.

—— (1983) “The Secondary Exploitation of Animals in the Old World”, *World Archaeology*, 15 (1): 90-104.

SHARPE, Katherine (2013) “Europe’s First Farmers”, *Archaeology*, a publication of the Archaeological Institute of America, April 30, 2013.

SPRETNAK, Charlene (2011) “Anatomy of a Backlash: Concerning the Work of Marija Gimbutas”, *Journal of Archaeomythology*, 7: 1-27.

(中央大学経済学部教授 経済史博)